

山梨県東八代郡豊富村

TAKABEUYAMADAIRA SITE

高部宇山平遺跡 II

ASARISI YAKATAATO

浅利氏館跡

SAIGUSASI YAKATAATO

三枝氏館跡

1995

豊富村教育委員会

山梨県東八代郡豊富村

TAKABEUYAMADAIRA SITE
高部宇山平遺跡 II

ASARISI YAKATAATO
浅利氏館跡

SAIGUSASI YAKATAATO
三枝氏館跡

1995

豊富村教育委員会

序

豊富村では、21世紀を目指した田園都市づくりをパストラル・シティ豊富と称して、「豊富村第2次総合計画」が策定されています。これは、本村の産業の活性化を促し、農村と都市の融合をめざした快適な生活空間の創出をめざすものであります。その事業の1つとして、住宅用地を確保し、人口流入の受け皿となるような宅地開発の計画を推進してきました。その開発予定地が宇山平一帯であります。

宇山平は、曾根丘陵の西側に形成された台地上にあり、埋蔵文化財が密集していることからもわかるように、古代から当時の人々によって集落が営まれるなど、歴史的環境に優れた地域であります。

今回の調査では、縄文時代後期の注口土器の完形品が見つかりました。その土器の形態や文様を見ると、縄文人の技術・芸術性のレベルの高さには、ただ圧倒されるばかりです。その他、縄文時代の住居址と思われるものや土坑、古墳の周溝などが検出されるなどの成果を得ました。

また、本村では、住宅建設の件数が近年、増加する中で、埋蔵文化財包蔵地周辺においても建設が予定される件数も増加しているのが現状です。今年度、それに関連した試掘調査を数か所で実施し、今回の報告書を作成するにあたり、同時に掲載することにしました。

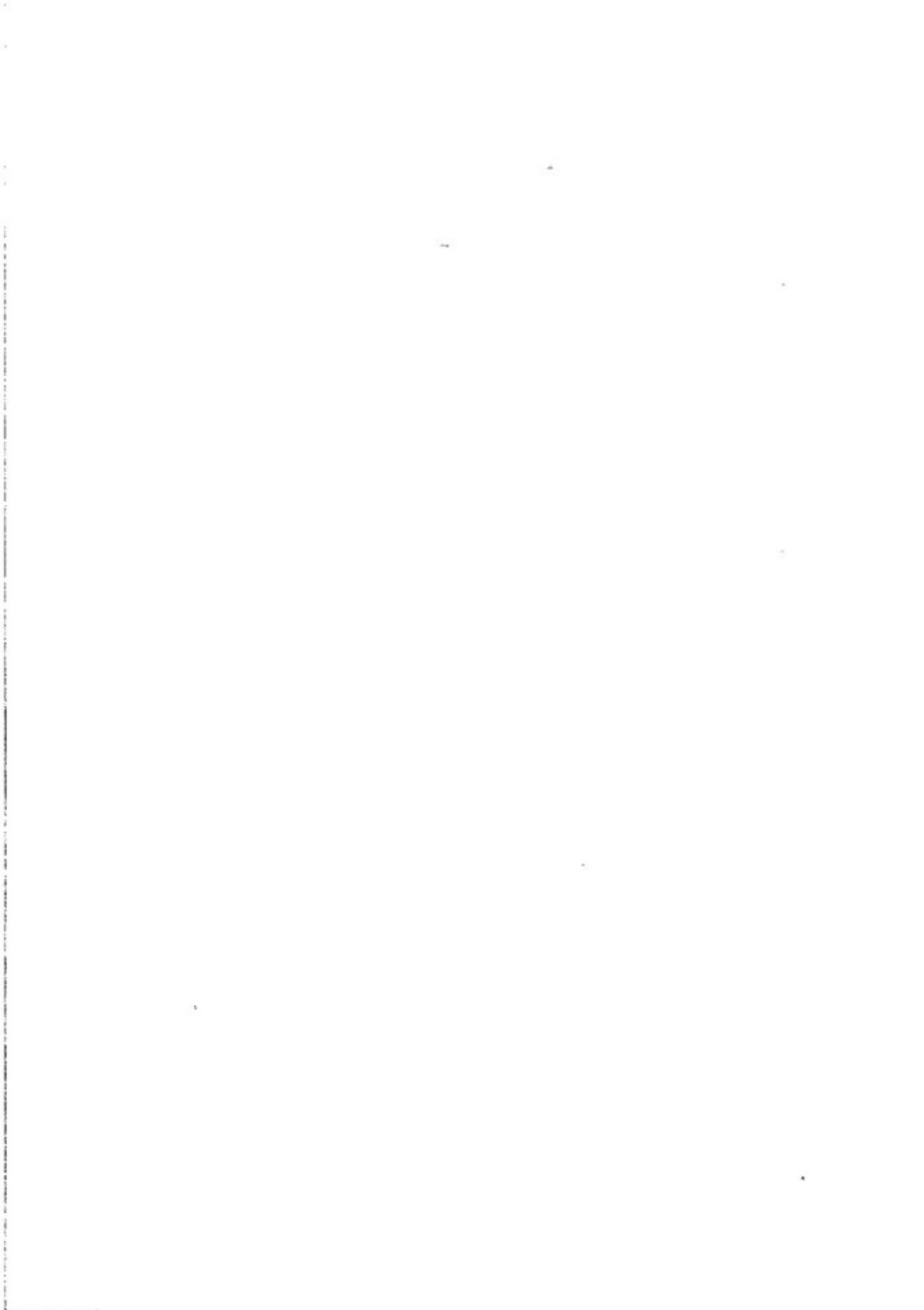
今回の調査にあたり、地元地権者の方々をはじめ、関係各位の皆様に御指導・御協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

本報告書の有意義な活用がされますことを切に願う次第です。

1995年3月31日

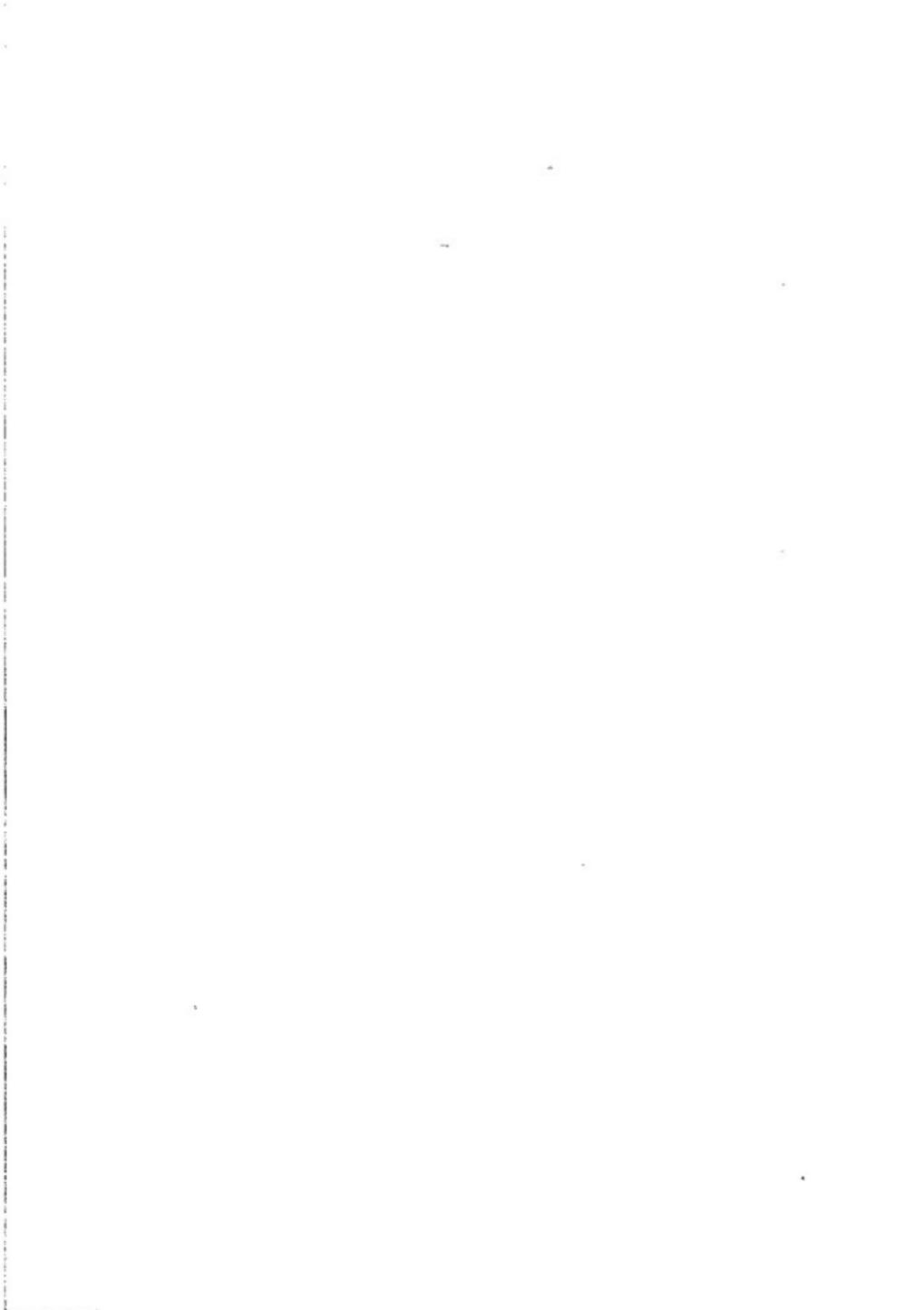
豊富村教育委員会

教育長 萩原保正



TAKABEUYAMADAIRA SITE

高部宇山平遺跡 II



例　　言

1. 本書は、平成6年度に発掘された山梨県東八代郡豊富村に所在する高部宇山平遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化庁・山梨県より補助金を受けて、豊富村教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、豊富村教育委員会で行った。
4. 本書における出土品及び記録図面・写真は、豊富村教育委員会が保管している。
5. 本報告書の執筆・編集・写真撮影は、岡野が行った。
6. 発掘調査・出土品等の整理及び報告書の作成については、次の方々の御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

(敬称略)

小野正文・保坂康夫（山梨県教育庁学術文化課）、末木健・今福利恵（山梨県立考古博物館）、小林広和（山梨県埋蔵文化財センター）、林部光（中道町教育委員会）、猪股喜彦・瀬田正明（一宮町教育委員会）、伊藤修二・西名博恵（八代町教育委員会）、望月和幸・金井京子（御坂町教育委員会）、河西学・樺原功一・平野修（帝京大学山梨文化財研究所）

7. 本調査にあたり、山梨県教育庁学術文化課及び地元高部区の皆様に御理解・御指導をいただいた。心から誠意を表する次第である。

調　　査　組　織

調査主体	豊富村教育委員会
調査担当者	岡野秀典
事務局	萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・飯室隆人（社会教育係長）・ 今井賢・井上妙・河野義男・鶴見貴美恵
調査参加者	石原喜代の・岩波幸子・桜井幸子・塙田よ志江・角田美代子・萩原定子・ 萩原津た子・村松かよ子・村松俊江
整理参加者	石原喜代の・岩波幸子・塙田よ志江・角田美代子

目 次

序

高部宇山平遺跡II

例言・調査組織

第Ⅰ章 調査に至る経緯	8
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9
第Ⅲ章 調査の経過と成果	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	20
第1節 第1トレンチの遺構と遺物	20
第2節 第2・3トレンチの遺構と遺物	23
第3節 第4トレンチの遺構と遺物	27
第4節 第5トレンチの遺構と遺物	30
第5節 第19トレンチの遺構と遺物	45
第6節 第26トレンチの遺構と遺物	45
第7節 第30トレンチの遺構と遺物	45
第Ⅴ章 まとめ	57
第1節 縄文時代について	57
第2節 古墳時代について	58
引用・参考文献	58
浅利氏館跡	
三枝氏館跡	
付編1 平成5年度高部宇山平遺跡の調査	

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	10	第12図 1号小穴(1/40)	24
第2図 調査区位置図(1/2,000)	11	第13図 1号溝(1/80)	24
第3図 第1~16トレンチ全体図(1/300)		第14図 2~17号小穴平面図(1/80)	25
	13~14	第15図 2~17号小穴断面図(1/40)	25
第4図 第17~30トレンチ全体図(1/300)		第16図 3号土坑(1/40)	26
	15~16	第17図 19号小穴(1/40)	26
第5図 第1~4トレンチ土層図(1/100)	17	第18図 2号溝・20号小穴・1号性	
第6図 第5~23トレンチ土層図(1/100)	18	格不明遺構(1/80)	28
第7図 第24~30トレンチ土層図(1/100)	19	第19図 4号土坑・21号小穴(1/40)	29
第8図 1号住居址(1/40)	20	第20図 5号土坑・22~24号小穴(1/40)	29
第9図 1号土坑(1/40)	20	第21図 6号土坑(1/40)	31
第10図 2号土坑(1/40)	21	第22図 7号土坑(1/40)	31
第11図 2号土坑土器出土状況(1/20)	21	第23図 3号溝(1/40)	32

第24図	4号溝(1/40)	32	第34図	縄文土器(9)(1/3)	41
第25図	5号溝(1/40)	32	第35図	縄文土器(10)(1/3)	42
第26図	縄文土器(1)(1/4)	33	第36図	縄文土器(11)(1/3)	43
第27図	縄文土器(2)(1/3)	34	第37図	縄文土器(12)(1/3)	44
第28図	縄文土器(3)(1/3)	35	第38図	弥生土器・土師器・須恵器・ かわらけ(1/3)	46
第29図	縄文土器(4)(1/3)	36	第39図	石製品(1)(1/2)	46
第30図	縄文土器(5)(1/3)	37	第40図	石製品(2)(1/3)	47
第31図	縄文土器(6)(1/3)	38	第41図	石製品(3)(1/3)	48
第32図	縄文土器(7)(1/3)	39	第42図	石製品(4)(1/3)	49
第33図	縄文土器(8)(1/3)	40			

表 目 次

第1表	出土遺物観察表(1)	50	第5表	出土遺物観察表(5)	54
第2表	出土遺物観察表(2)	51	第6表	出土遺物観察表(6)	55
第3表	出土遺物観察表(3)	52	第7表	出土遺物観察表(7)	56
第4表	出土遺物観察表(4)	53			

写真図版目次

図版 1	調査前風景 (第1~3トレンチ付近)	作業風景	1号住居址 1号土坑 2号土坑 2号土坑土器出土状況(1)
図版 2	2号土坑土器出土状況(2)	2号土坑土器出土状況(3)	第2トレンチ小穴群 3号土坑 3号土坑土器出土状況(1) 3号土坑土器出土状況(2)
図版 3	2号溝 20号小穴	4号土坑・21号小穴 5号土坑・22~24号小穴	6号土坑 7号土坑
図版 4	2号土坑出土土器(1) (側面・正面・背面・上面)	2号土坑出土土器(2) 2号土坑出土土器(3) 20号小穴出土土器	
図版 5	縄文土器(1) 縄文土器(2)	縄文土器(3) 縄文土器(4) 縄文土器(5)	石製品

第Ⅰ章 調査に至る経緯

山梨県東八代郡豊富村高部字宇山平他に所在する高部宇山平遺跡及びその周辺は、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が表面採集できる。現在、地目は畑であり、その多くは、養蚕のための桑及び果樹である。桑畑の中には荒地化し、果樹その他の普通畑に変更する例も少なくないのが現状である。

そのような現状下で豊富村では、昭和56年度からの10年間を対象とした「豊富村総合計画」(第1次)を策定してきたが、その間にリニア推進、若年世代の村外流出など村をとりまく社会・経済環境は、大きく変化した。そこで豊富村では、「パストラル・シティ(田園都市)豊富」を目指した「豊富村第2次総合計画」が平成3年度に策定された。その中で、平成12年度までに本村の人口を現在の3,500人から5,500人に増加することを計画しており、それに対応するための住宅用地の確保につとめることを推進している。その用地予定地に高部区と大鳥居区にまたがる宇山平が選定されたのだが、同地は、高部宇山平遺跡をはじめ、埋蔵文化財包蔵地が分布していることなどから、平成2年度より、その取扱いについて県文化課の指導により、今後の開発計画に対処するために資料収集も含め発掘調査を実施しており、平成6年度においても、国・県からの補助金を受け、村教育委員会が主体となって調査を行うことになった。発掘調査面積は、約408m²である。

平成6年10月7日付け、豊教発第223号で文化財保護法第98条の2第1項の規定による、埋蔵文化財発掘調査の通知書を文化庁長官(県教委経由)に提出する。

発掘調査は、平成6年11月7日から開始し、12月20日に現地調査を終了した。その後、報告書作成までの整理作業を完了したのは、平成7年3月29日であった。

平成6年12月22日付けで遺失物法第13条の規定による、埋蔵物発見届を南甲府警察署長に提出した。

第II章 遺跡の位置と環境

高部宇山平遺跡は、山梨県東八代郡豊富村高部字宇山平他に所在し、甲府盆地の南側から東側に連なる曾根丘陵を形成する宇山平と呼ばれる台地上の北側に立地する。

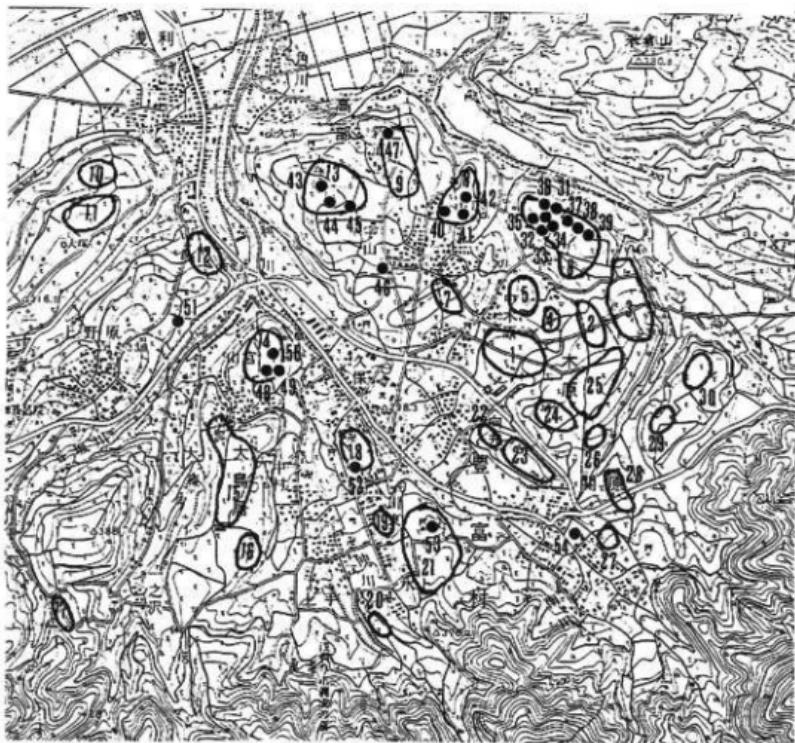
曾根丘陵は、山梨県の中央部に広がる甲府盆地の南縁、富士北麓と甲府盆地を分断する御坂山地の北方に広がり、長さ約13km、幅2~3km、盆地との比高50~150mの丘陵である。宇山平は、曾根丘陵の西側に位置し、北側に笛吹川が流れ、また東西を七覚川、浅利川に挟まれた台地である。標高は、台地上の西端に王塚古墳が立地するが、その墳丘上に341.8mの三角点が設置されている。

高部宇山平遺跡の周辺地域には、54か所の遺跡が存在し、その大半が台地上に立地する。その初源として、横畠遺跡²⁰・関原弥治郎遺跡²¹から先土器時代のナイフ形石器が出土している。また、高部宇山平遺跡の七覚川を挟んで東に対峙する米倉山においても先土器時代のナイフ形石器が数点出土している。

それに続く縄文時代になると、周辺の台地上の26か所で点在するようになる。(1~4、6~11、13~21、23~26、28~30) また、弥生時代は、13か所に分布する。(3、6~11、13~15、19、20、23)

古墳時代は、散布地が17か所で、古墳が24基あるが、その多くは、墳丘が削平されて消滅したものが多く、また未確認のも含めて本来は、24基以上築造されたであろう。(1、3、6、8、9、11、13~16、18、20、22~25、29、31~54) その分布として、6世紀前半とされる帆立貝式古墳の三星院古墳を中心とする三星院古墳群、宇山平古墳群、城原古墳群、田見堂及鳥居原古墳群の4群に大別できる。特に、宇山平古墳群内の王塚古墳は、全長61.2mの帆立貝式古墳で、内部施設が合掌式石室と特異な形態を有する。また、田見堂及鳥居原古墳群内には、三珠町に属する台地上に赤鳥元年銘鏡が出土した鳥居原孤塚古墳、また、その西側には、円筒埴輪をもつ大塚古墳などの古墳が点在する。

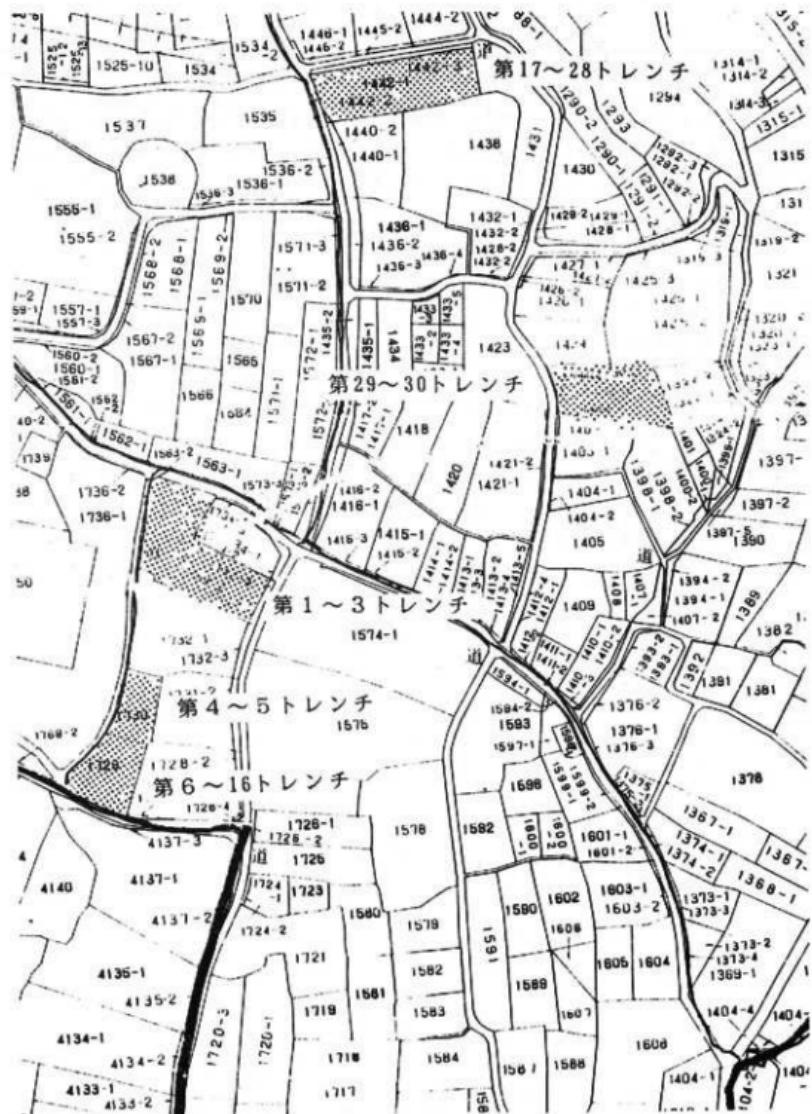
奈良・平安時代の散布地は、10か所ある。(2、7、8、10、11、13、18、19、21、25、26) 中世以降は、6か所で、その中で館跡としては、壇の浦の合戦で活躍した甲斐源氏の浅利与一館跡、また、武田家家臣の三枝土佐守虎吉館跡がある。(いずれも『甲斐国志』の記述に基づく)(2~5、12、27)



- | | | |
|--------------|--------------|------------|
| 1. 駒平遺跡 | 2. 上三口西遺跡 | 3. 上三口遺跡 |
| 4. 高内遺跡 | 5. 三枝土佐守船跡 | 6. 上野原遺跡 |
| 7. 代中遺跡 | 8. 中尾遺跡 | 9. 高部宇山平遺跡 |
| 10. 富の下遺跡 | 11. 熊野原遺跡 | 12. 浅利氏館跡 |
| 13. 大鳥樹宇山平遺跡 | 14. 城原遺跡 | 15. 見間遺跡 |
| 16. 桜田遺跡 | 17. 西沢遺跡 | 18. 久保田遺跡 |
| 19. 川東遺跡 | 20. 久保田遺跡 | 21. 横畠遺跡 |
| 22. 木原赤二郎遺跡 | 23. 間原赤治郎遺跡 | 24. 原遺跡 |
| 25. 東原遺跡 | 26. 中原遺跡 | 27. 植戸原遺跡 |
| 28. 浜井塙遺跡 | 29. 付山南遺跡 | 30. 付山北遺跡 |
| 31~39 無名塙 | 40~42 無名塙 | 43. 王塚古墳 |
| 44~46. 無名塙 | 47. 伊勢塚古墳 | 48. 城原大塚古墳 |
| 49~50. 無名塙 | 51. 金塚古墳 | 52. 無名塙 |
| 53. お側崎さん古墳 | 54. おさんこうじ古墳 | |



第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)



第2図 調査区位置図(1/2,000)

第III章 調査の経過と成果

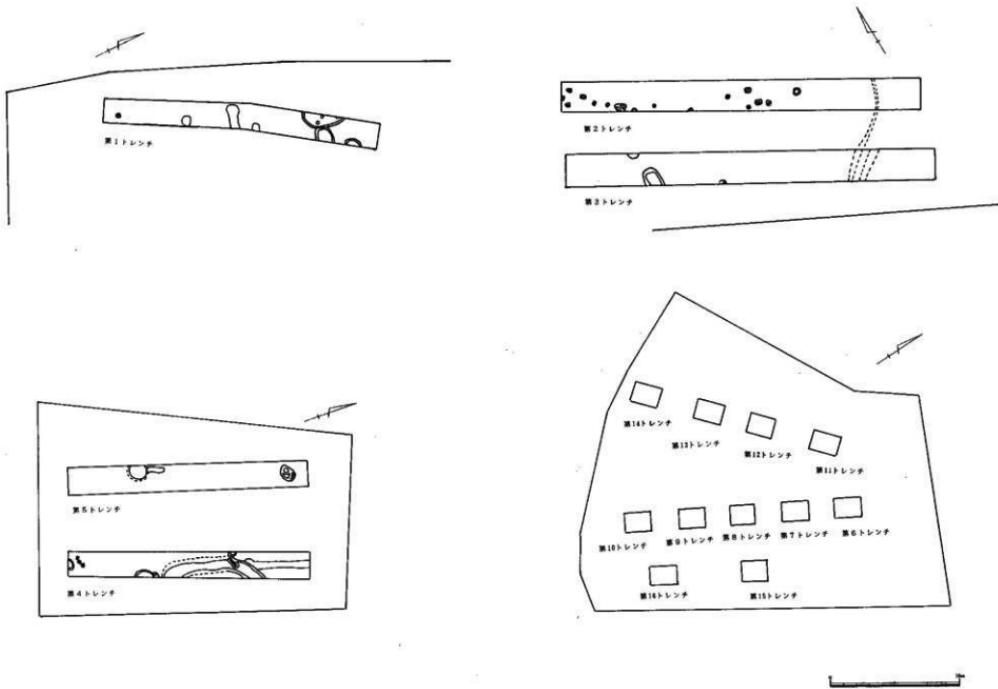
発掘調査は、平成6年11月7日から12月20日まで行った。調査方法は、調査対象地に応じて任意に幅2m、長さは、1~30mの調査区（トレンチ）を30か所設定して、埋蔵文化財有無の確認を行った。表土はぎは、重機によりローム面まで掘削し、ローム面を遺構確認面とした。遺構確認精查及び遺構の覆土掘削は、人力により行った。

本遺跡の基本層序は、次に示すとする。

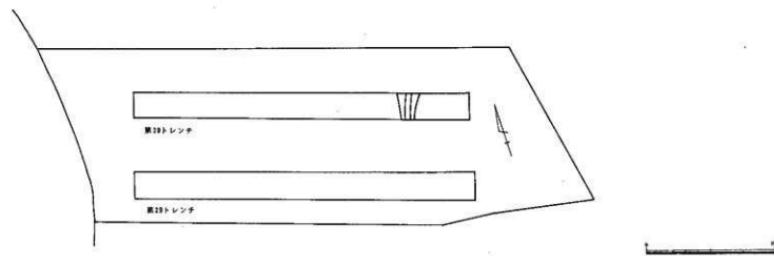
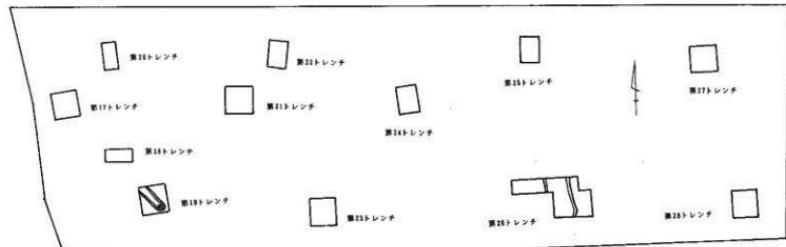
- 第I層 褐色土層
- 第II層 黒褐色土層
- 第III層 暗褐色土層
- 第IV層 黄褐色ローム層

ただし、この層序は、本遺跡全体に共通するものではない。第I層は、耕作土であり、各トレンチに共通して見られる。第II層とした黒褐色土と第III層とした暗褐色土は、前年度以前の調査では、暗褐色土の方が上層として確認されていたが、今回の調査では、それらが逆転して確認された。第II・III層からガラスの破片などが出土しており、近年の耕作土の可能性がある。

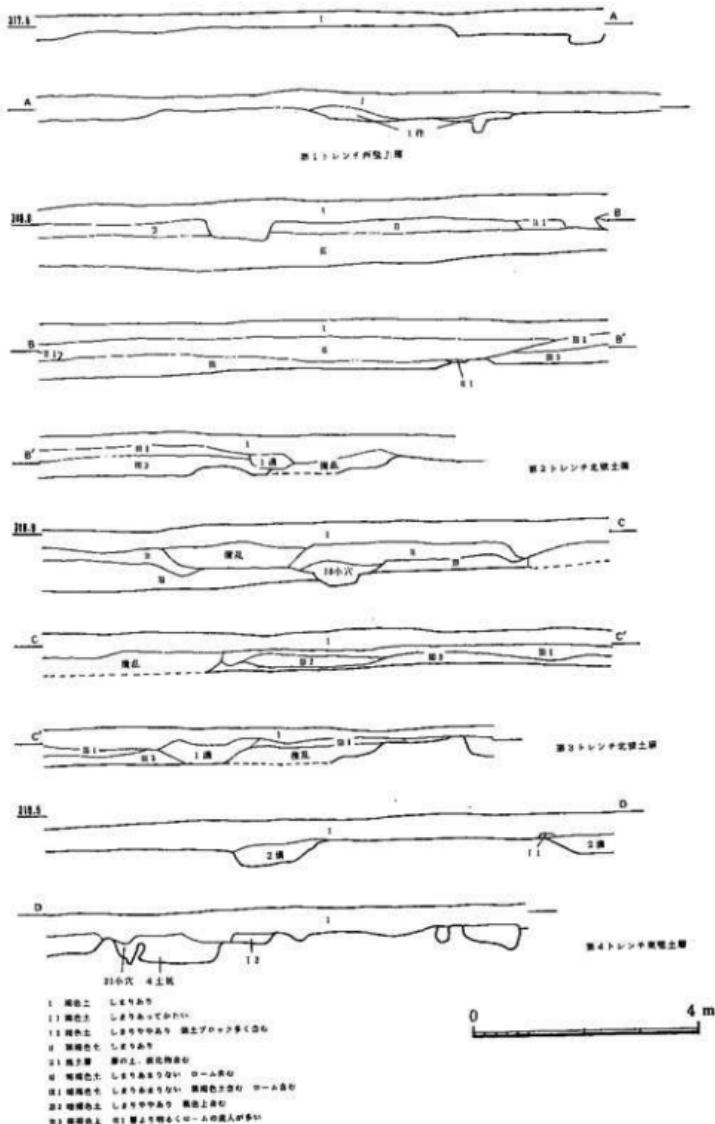
調査の結果、縄文時代後期の住居址1軒、土坑2基、小穴1基、古墳時代前半の土坑1基、古墳の周溝1条、時期不明の土坑4基、溝4条、小穴23基、性格不明遺構1基が検出され、縄文時代から古墳時代にかけての土器が多数出土した。



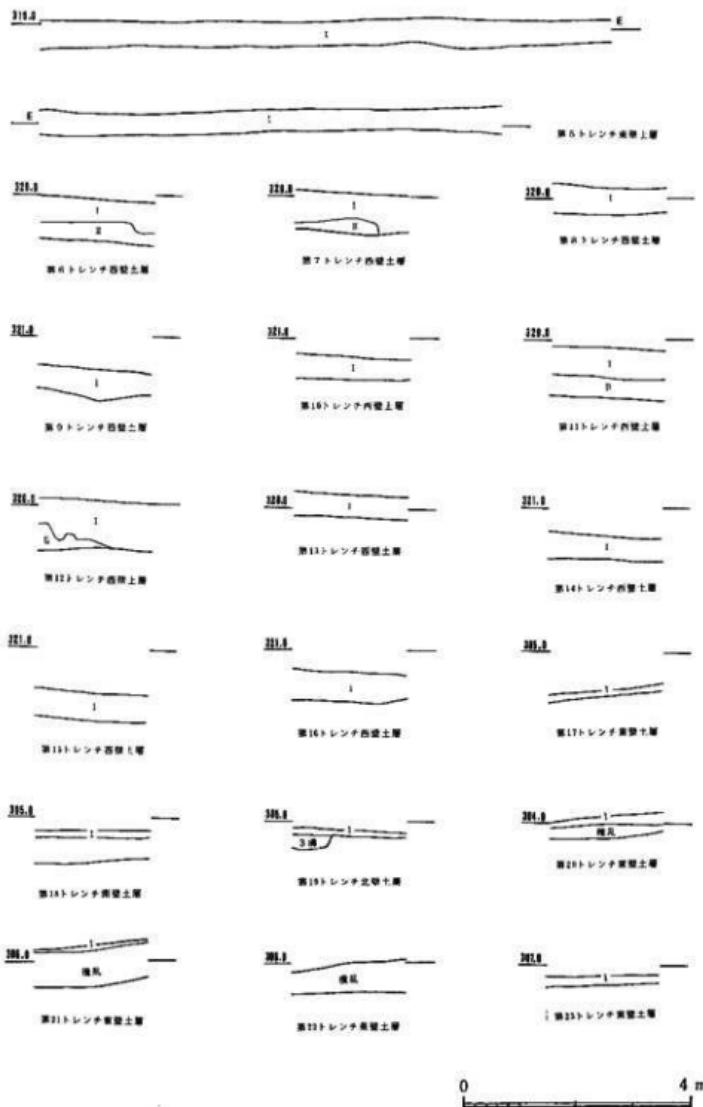
第3図 第1~16トレンチ全体図(1/300)



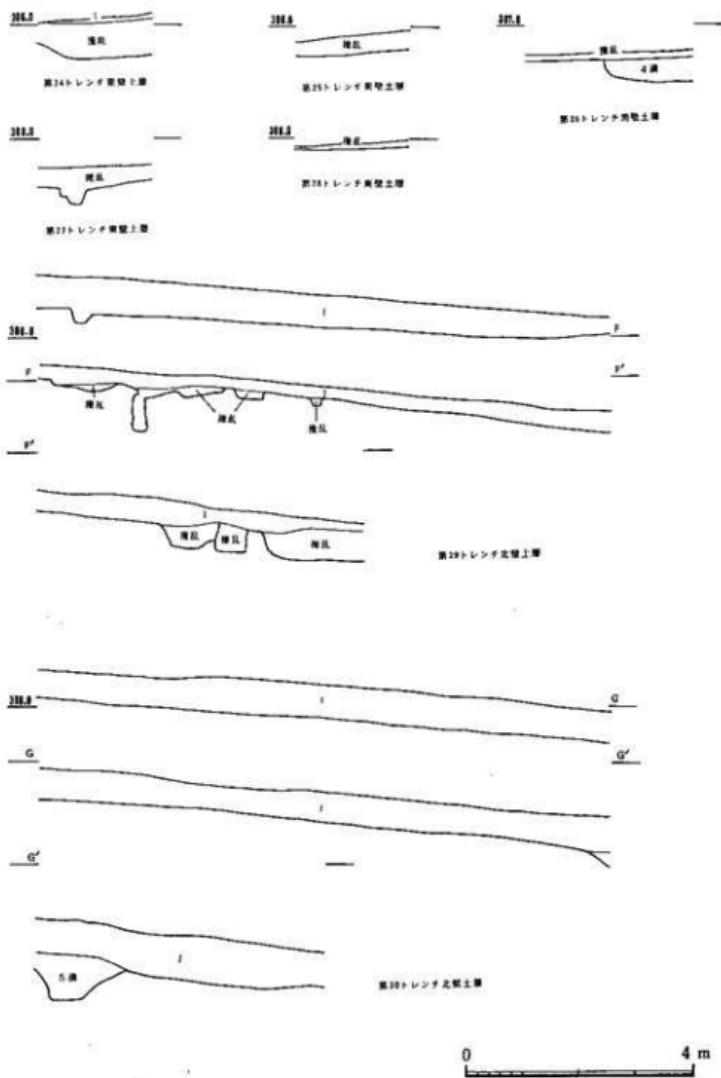
第4図 第17~30トレンチ全体図(1/300)



第5図 第1～4トレンチ全体図(1/100)



第6図 第5～23トレンチ土層図(1/100)



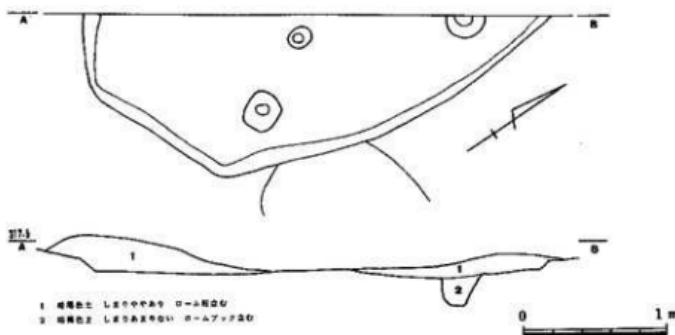
第7図 第24~30トレンチ断面図(1/100)

第IV章 遺構と遺物

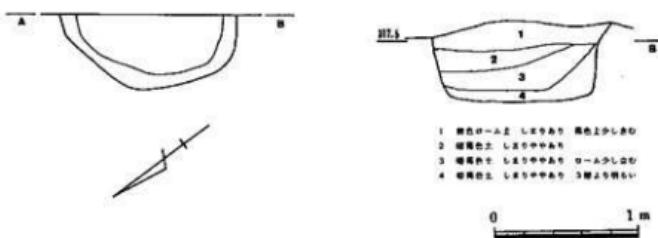
第1節 第1トレンチの遺構と遺物

1号住居址（第8・28図）

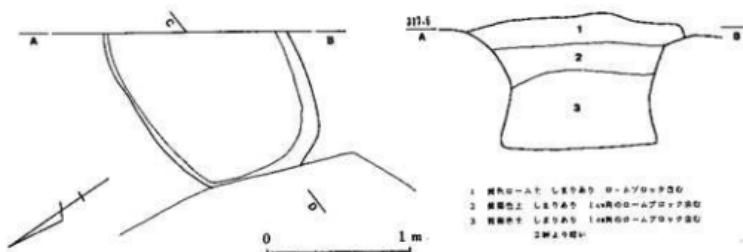
第1トレンチ北側に位置し、西半分は調査区外のため、全体的な平面プランは、不明である。南北幅330cm以上、深さは、遺構の上部が耕作により大きく削平されているために10cmほどし



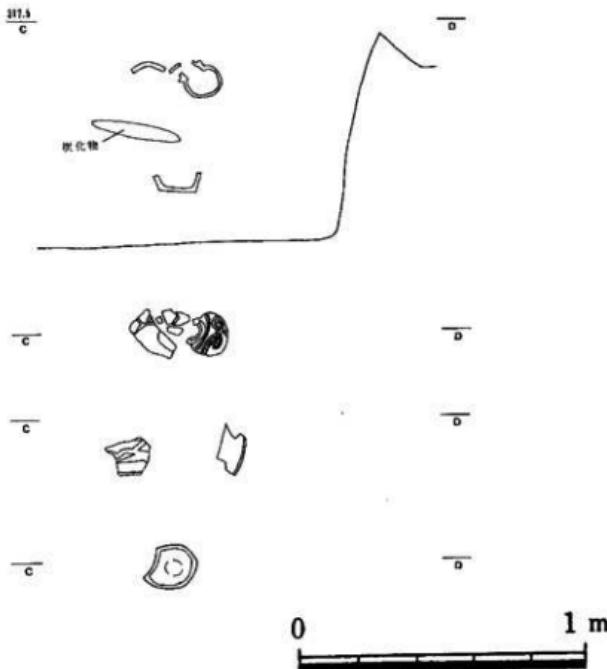
第8図 1号住居址(1/40)



第9図 1号土坑(1/40)



第10図 2号土坑(1/40)



第11図 2号土坑出土状況(1/20)

か残存していない。底面は、平坦であり、柱穴と思われる小穴が3基検出された。口径20~30cm、深さは、6~20cmを測る。炉址は、確認できなかった。覆土は、暗褐色土である。

出土遺物は、縄文時代後期前葉の土器が出土した。

1号土坑（第9図）

第1トレンチ北側に位置し、西半分は、調査区外である。平面プランは、円形である。南北幅125cm、深さは、55cmを測る。立ち上がりは、急であり、底面は、平坦である。覆土は、上部に黄褐色ロームが10~20cmの厚さで堆積し、その下半部は、暗褐色土である。

出土遺物は、縄文時代後期の土器が出土しているが、混入品の可能性がある。

2号土坑（第10・11・26・27図）

第1トレンチの北側に位置し、東半分は、調査区外にある。また、西側の立ち上がり部分が1号住居址と切り合っているが、その新旧関係は、つかめなかった。平面プランは、隅丸方形と思われ、東西幅120cm以上、南北幅120cm、深さ80cmを測る。立ち上がりは、急であり、壁面は、多少オーバーハング気味である。底面は、平坦である。覆土は、上部に黄褐色ロームが20cmの厚さで堆積し、その下半部は、黄褐色土である。

出土遺物は、縄文時代後期前葉から中葉にかけての土器が出土している。1は、注口土器である。横倒しになった状態で出土し、土器の中に注口部を胴部との接合部からはぎ取り、それをさらに半分に折ったものと、注口部と反対側の把手の一部が埋納されていた。それを接合すれば、注口部の表面が剥離しているものの全く完形品といつてよい。口径7.4cm、器高14.2cm、器厚0.5cmで、注口部の先端の厚さは、0.2cmを測る。黒褐色を呈し、雲母の混入が見られる。胴部は、球形を呈し、口縁部は、胴部との境は外湾し、上部で内湾して屈曲する。また、口唇部では、蓋受け様の部位を持ち、直立した立ち上がりを見せる。口縁部には、一対の8の字状の意匠をした把手が付けられる。把手の高さは、4.2cm。文様は、全体的に沈線文で描かれ、口縁部では、屈曲した上面では、繩もしくは植物の蔓を模したものと思われる連続沈線を描き、その周りを1本の沈線で囲んでいる。また、側面にも上部に1本、下部に3本の平行沈線の間にも同じような連続沈線が描かれている。胴部では、肩部に9本の多重沈線、左右の側面には、7本の多重沈線により曲線文を描き、注口の接合部では、それを囲むかのように9本の多重沈線、その反対側の土器の後方部には、沈線による渦巻文があり、これらの多重沈線の曲線文の間にこれらを結ぶかのように緊縛文とでも呼ぶべき沈線によるひも状の結びの表現がある。また、底部に近い胴部下半部に3本の平行沈線がある。底部には、綱代痕が残る。時期は、縄文時代後期中葉と考えられる。

2は、1の注口土器と同レベルで、東側のすぐ真横で出土した深鉢である。口径12.6cm、器高16.9cm、器厚0.4cm、色調は、褐色を呈し、胎土に白色粒が含まれる。口縁部には、内面側に2孔穿たれた小突起が1対、1孔が穿たれた小突起が2対付けられており、胴部上半部には、2段の平行沈線が施される。その上段は、6本、下段は、5本の沈線であり、胴部下半部には、

3本の沈線による曲線文を描く。底部には、網代痕が残る。時期は、注口土器と同じ縄文時代後期中葉と思われる。

3は、口縁部には、3本の刻目凸帯を巡らし、胴部には、沈線区画内L R単節縄文充填施文が広がる。縄文時代後期前葉の深鉢の破片である。土坑内中層より出土した。

4は、無文の底部で、土坑内下層から出土し、正位で出土した。底径11.2cm、残存高8.5cmで、橙褐色を呈する。底面には、網代痕が残る。

1号小穴（第12図）

第1トレンチ南側に位置し、平面プランは、円形を呈する。直径25cm、深さ30cmである。縄文土器の小破片が2点出土している。

第2節 第2・3トレンチの遺構と遺物

1号溝（第13図）

平面プランでは、確認できずに、第2・3トレンチの壁面で確認できたもので、第III1層からの掘り込みなので、近年の掘削と思われる。第2トレンチでは、東側の壁面が削平されており、幅の寸法は、不明だが、第3トレンチの南北壁面の観察によると、120～180cmで、深さは、30～45cmと一定しない。覆土は、黒褐色土である。

3号土坑（第16・28図）

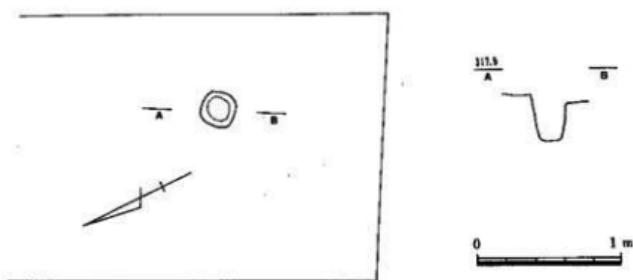
第3トレンチの調査区西側に位置し、南半分は、調査区外である。平面プランは、隅丸長方形と思われる。東西幅130cm、南北幅150cm以上、深さは、80cmを測る。立ち上がりは、急であり、底面は、平坦である。覆土は、4層に分けられる。

出土遺物は、覆土上層から古墳時代前期から中期にかけての土師器壺の胴部の破片を器にして、花崗岩質の1cm角の小砾が混入した比較的の良質な白色粘土を500gほどのせ、その上に皿がわりにしていた壺の胴部の同一個体の破片を蓋として覆っていた。その粘土は、まだ粘性が残っている状態であった。その他、縄文土器も混入していた。

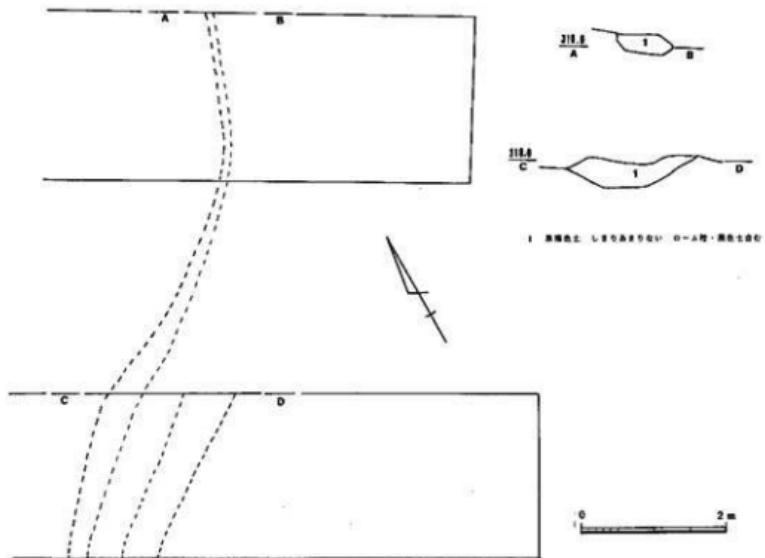
2～17号小穴（第14・28図）

第2トレンチ内において、西半分の範囲において16基の小穴が確認された。しかし、この中には、自然的な落ち込みが含まれている可能性もある。口径20～40cmの平面プランが円形あるいは、長方形を呈したものや8・17号小穴のように長軸が60～70cmで不整形プランを呈するものなどがある。深さは、10～30cm程度で、16号小穴のように50cmに達するものもある。覆土は、III層の土であり、17号小穴では、焼土が混入していた。

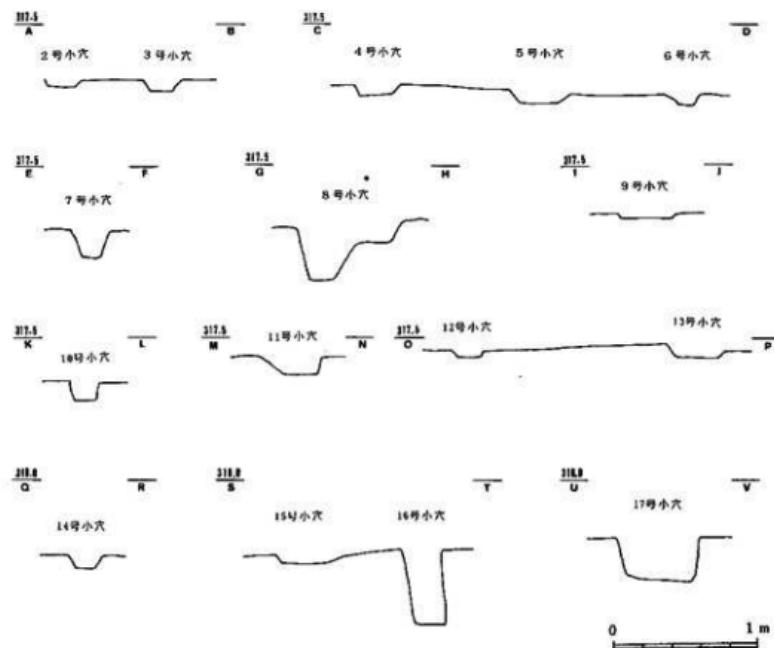
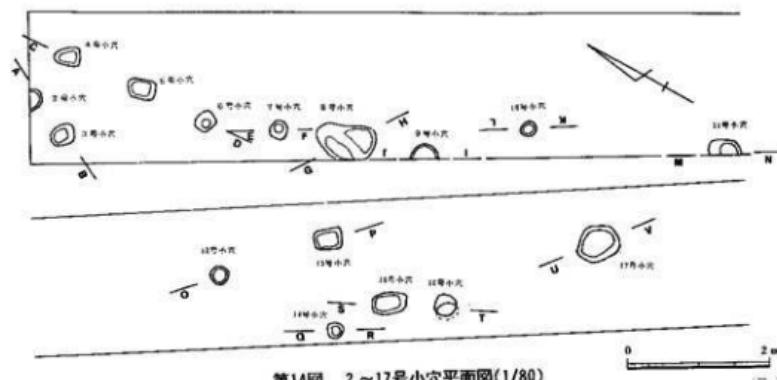
出土遺物は、4・16・17号小穴で縄文土器片や土師器片が出土した。8は、16号小穴から出



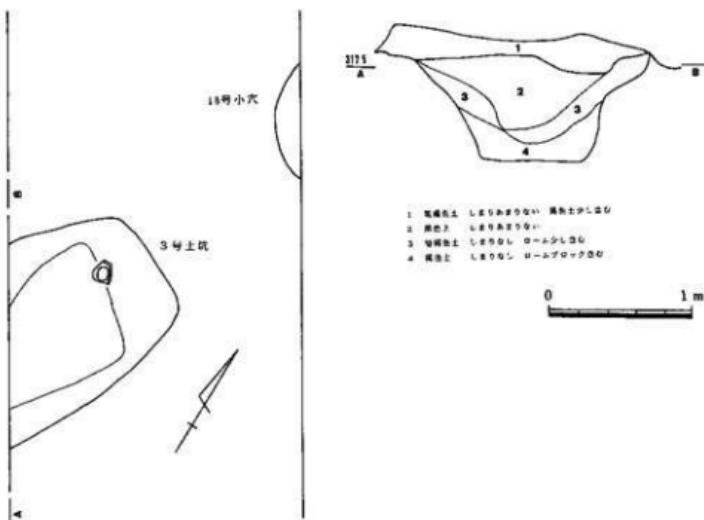
第12図 1号小穴(1/40)



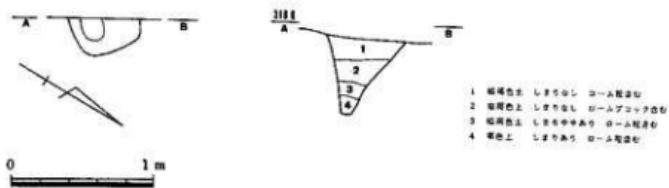
第13図 1号溝(1/80)



土した時期不明の縄文土器の底部で、推定底径12.0cmで、底面に網代痕が残る。9は、16号小穴から出土し、縄文時代後期前葉の沈線文による土器片である。



第16図 3号土坑(1/40)



第17図 19号小穴(1/40)

18号小穴（第16図）

第3トレンチ西側に位置し、北側の大半は、調査区外で、平面プランや遺構の性格など詳細不明な点が多い。III層からの掘り込みで、調査区内で確認できる範囲での状況は、円形プランを呈し、東西軸の幅は、確認面では、85cmであるが、調査区の北壁土層で見ると、155cmの規模をもつ。深さは、40cmほどであるが、傾斜の途中と思われ、北側にさらに深くなるようである。覆土は、黒褐色土と暗褐色土の2層である。

出土遺物はない。

19号小穴（第17図）

第3トレンチのほぼ中央に位置し、南側は、調査区外である。平面プランは、隅丸方形を呈する。東西幅50cm、南北幅20cm、深さは、50cmを測る。壁面は、西側の立ち上がりが比較的緩やかである。覆土は、暗褐色土と褐色土で、暗褐色土は、混入物などから3層に分けられる。出土遺物はない。

第3節 第4トレンチの遺構と遺物

2号溝（第18・28図）

第1トレンチの北端より3~11m南にかけて位置し、遺構の中心部分を表土はぎの際に削平してしまったが、底部付近の残存していた覆土の状況から、溝の走りは、調査区内で湾曲し、東方向に伸びる。全体的には、円形に廻った溝と推定でき、古墳の周溝と思われる。溝の幅は、170~210cm、深さは、30~50cmを測る。壁面は、上部が耕作により大きく削平を受けているものと思われ、立ち上がりの緩急は、全体的には不明である。底面は、やや南側に上がっていく感がある。覆土は、3層に分けられる。

出土遺物は、土師器の壺の胴部の他、縄文時代前期後葉、中期末葉から後期前葉の土器が混入していた。

1号性格不明遺構（第18図）

2号溝の底面の精査を行っていたところ、長軸80cmほどの落ち込みを見つけ、覆土を掘削していくうちに西側の壁面に入り込むようになり、また、掘り進んでいくうちに20号小穴も確認できた次第である。最終的に2号溝と20号小穴と切り合った遺構と判断したが、それらの新旧関係が不明であり、その性格も詳細不明である。あるいは、平面プラン、落ち込み具合等から見て2つ以上の小穴が重なったものもあるが、今回は、同一遺構として処理した。

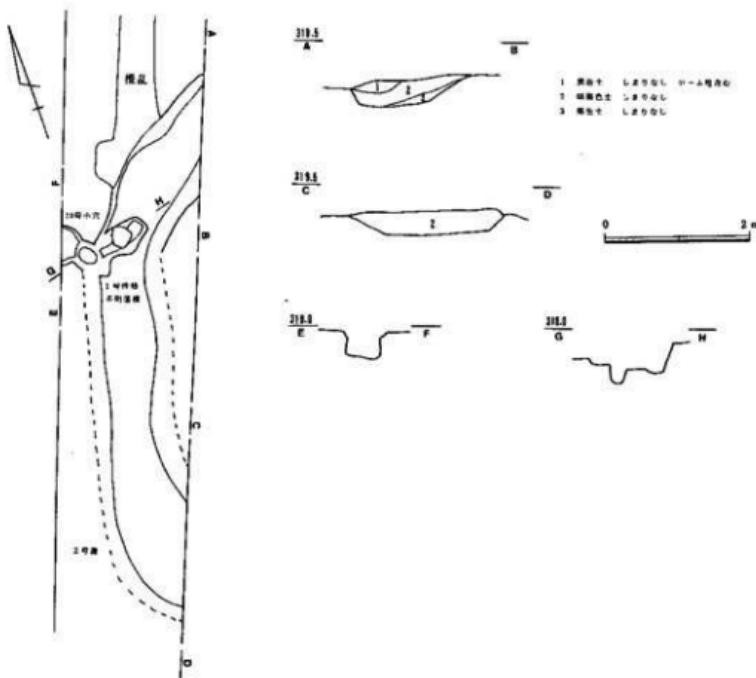
長軸幅115cm、短軸幅40~55cmで、東側の底面に2号溝の底面より35cmの深さを持つピット状の落ち込みが見られる。2号溝の西壁と本遺構が切り合った付近では、確認面より40cmの深さを測る。

出土遺物は、縄文土器の他、土師器片も出土した。

20号小穴（第18・29図）

第4トレンチのやや北寄りに位置し、東側は、1号性格不明遺構と切り合っており、西側は、調査区外である。平面プランは、円形を呈する。東西幅26cm以上、南北幅55cm、深さは、40cmを測る。壁面は、垂直に立ち上がり、底面は、南側に上がっていく。

出土遺物は、23は半載竹管による沈線文で、縄文時代後期前葉の深鉢である。波状口縁で、推定口径27.0cm、残存高20.5cmである。24も半載竹管による沈線文で描かれ、推定口径32.0cm、



第18図 2号溝・20号小穴・1号性格不明遺構(1/80)

残存高9.5cm、色調は、橙褐色を呈する。

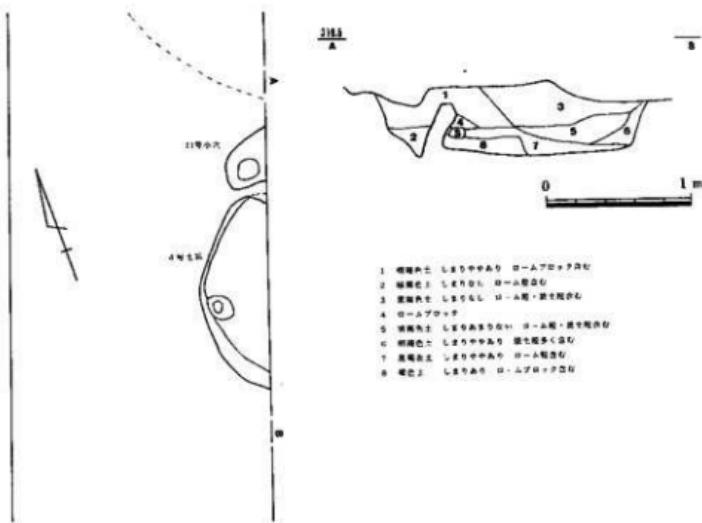
21号小穴（第19図）

第4トレンチのはば中央に位置し、東側は、調査区外に伸びる。平面プランは、隅丸長方形を呈する。東西幅28cm、南北幅40cm、深さは、45cmを測る。壁面は、北側が比較的緩やかに立ち上がる。覆土は、明褐色土と暗褐色土の2層である。

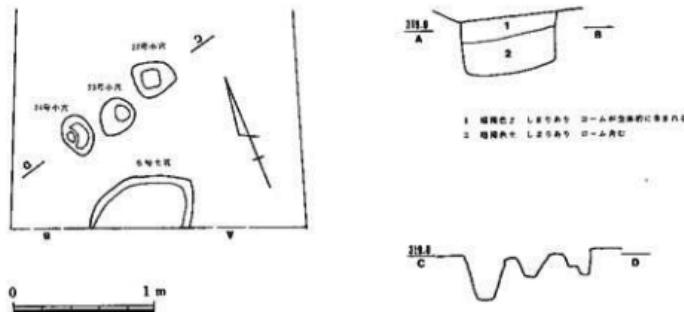
出土遺物は、縄文時代後期の土器片が6点出土した。

4号土坑（第19・28図）

第4トレンチのはば中央にあり、21号小穴の南側に隣接して位置し、東半分は、調査区外である。平面プランは、円形であり、南北幅135cm、深さは、40cmを測る。立ち上がりは、急であり、北側の壁面は、オーバーハングしている。底面は、平坦であり、西壁の下場付近に口径15cm、深さ12cmほどの小穴が1つ見られる。覆土は、6層に分けられた。



第19圖 4號土坑・21號小穴(1/40)



第20図 5号土坑・22~24号小穴(1/40)

出土遺物は、縄文時代後期初頭の土器で、14・15は、沈線区画内に縄文を施している。

5号土坑（第20図）

第4トレンチ南端にあり、南側は、調査区外に伸びる。平面プランは、不明である。東西幅70cm、南北幅40cm以上、深さは、44cmを測る。立ち上がりは、ほぼ垂直である。底面は、西側に上がっていく。覆土は、暗褐色土でロームの混入から2層に分けられる。

出土遺物は、縄文時代後期の土器が出土した。

22～24号小穴（第20・29図）

第4トレンチ南側の5号土坑の北側に東西方向に3基並んで検出した。平面プランが方形あるいは橢円形を呈し、口径20～30cm、深さは、15～30cm程度である。覆土は、22号が黒色土、23～24号が暗褐色土である。

出土遺物は、22・23号で縄文土器片がそれぞれ数点出土した。25は、22号小穴出土で、縄文時代後期初頭の土器であり、沈線区画内に円形刺突を列する。

第4節 第5トレンチの遺構と遺物

6号土坑（第21・30・42図）

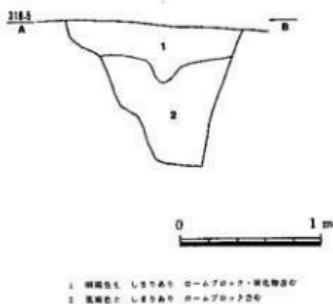
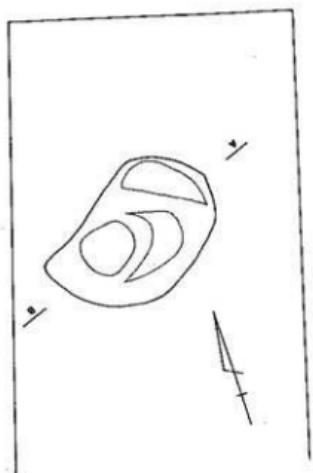
第5トレンチの北側にあり、平面プランは、橢円形を呈する。長軸幅127cm、短軸幅80cm、深さは、100cmを測る。立ち上がりは、北側に確認面より20cmと60cm下の2か所にテラスがあり、南側の立ち上がりは、急である。底面は、北東側にテラスがあるため、南西側に寄っている。覆土は、明褐色土と黒褐色土の2層に分けられる。

出土遺物は、26・27は、中期末葉の土器で、26は、楕円区画内に縄文LRが施され、27は、櫛歯状工具による沈線が見られる。28～32は、後期初頭で、28は、無文の口縁部であり、29・31は、沈線文、32は、縄文地に沈線文が施される。33～38は、後期前葉で、33は、横走沈線の下に列点文、34は、沈線区画内に円形刺突、35～37は、沈線文、38は、沈線区画内に縄文LRを施す。39～41は、底部で、39の底面には網代痕が残る。42は、注口部で橙褐色を呈する。168は、多孔石である。

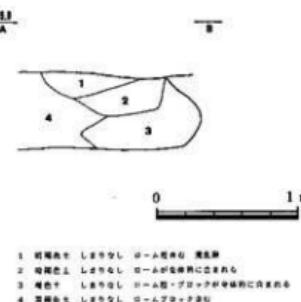
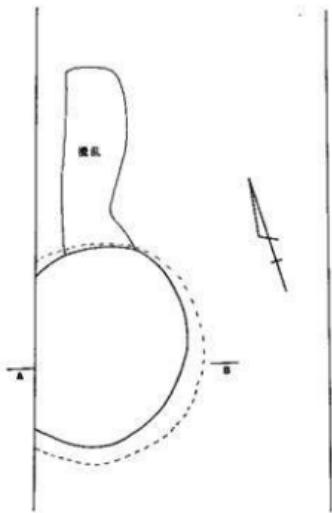
7号土坑（第22・31図）

第5トレンチ中央の南寄りにあり、遺構の上部の一部に溝状の擾乱を受けている。平面プランは、直径140cmの円形を呈する。深さは、50cmを測る。壁面は、全体的にオーバーハングしており、底面は、平坦である。覆土は、3層に分けられる。本遺構は、いわゆる袋状土坑である。

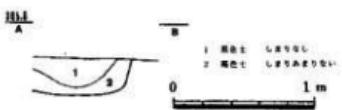
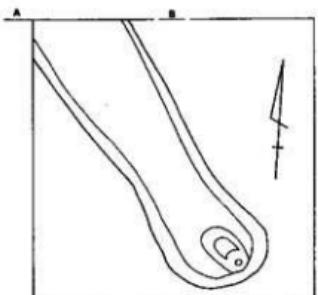
出土遺物は、43は、縄文時代前期後葉で、条線地文に結節状隆線が施され、44は、縄文時代



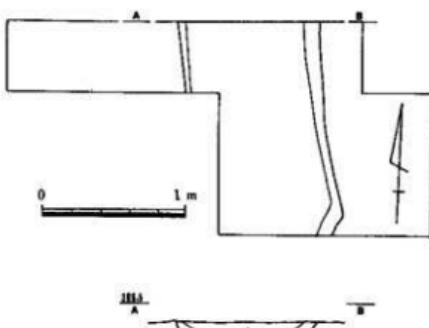
第21図 6号土坑(1/40)



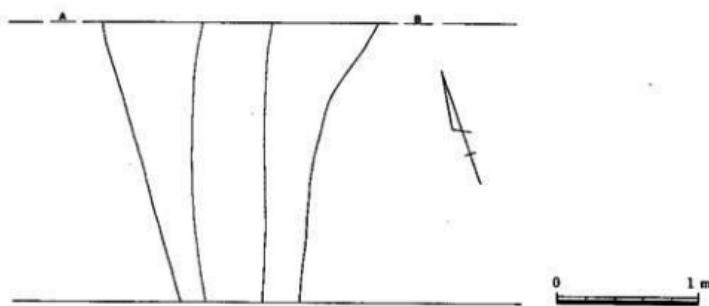
第22図 7号土坑(1/40)



第23図 3号溝(1/40)

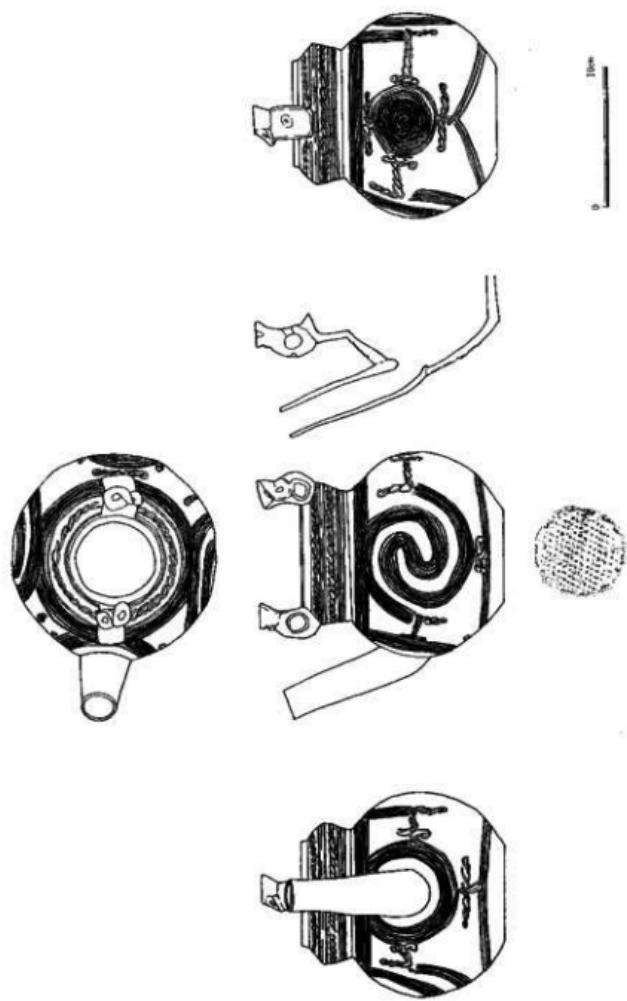


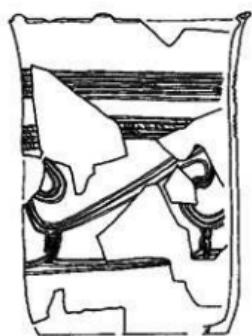
第24図 4号溝(1/40)



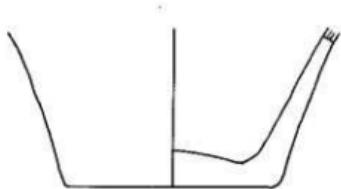
第25図 5号溝(1/40)

第26圖 繩文土器(1/4)

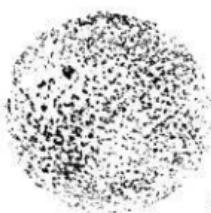




2



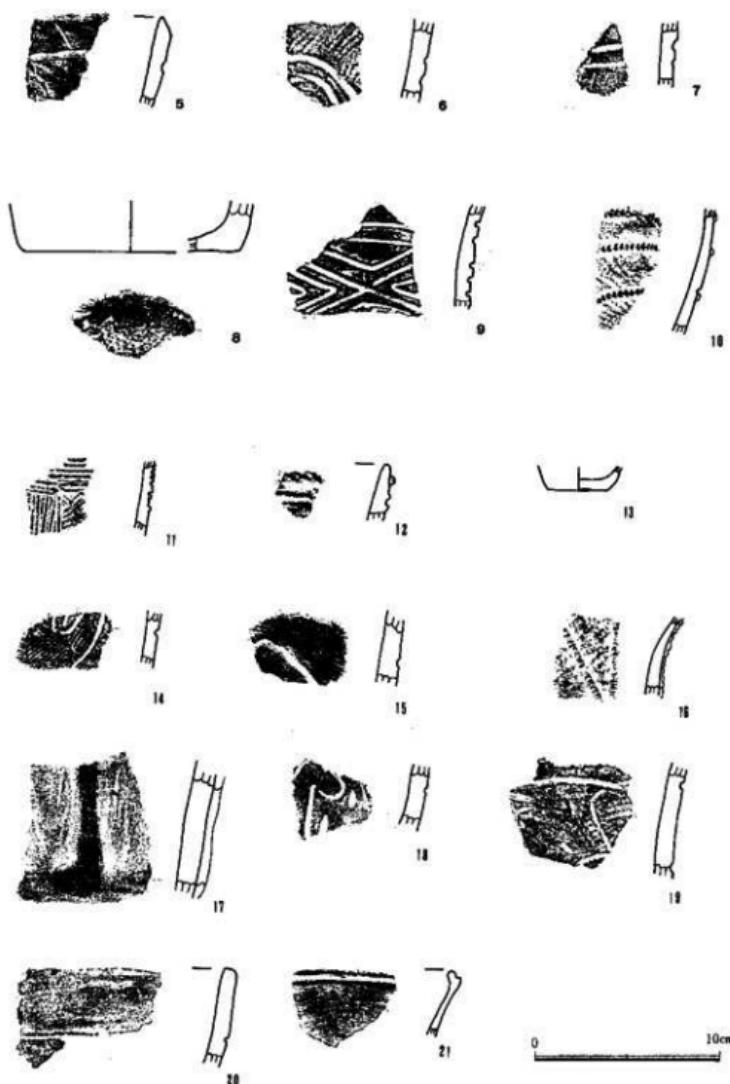
4



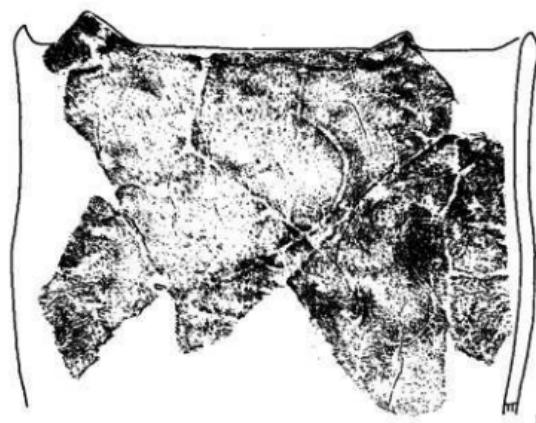
3

0 10cm

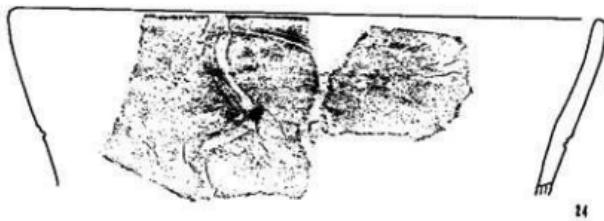
第27図 繩文土器(2)(1/3)



第28図 織文土器(3)(1/3)

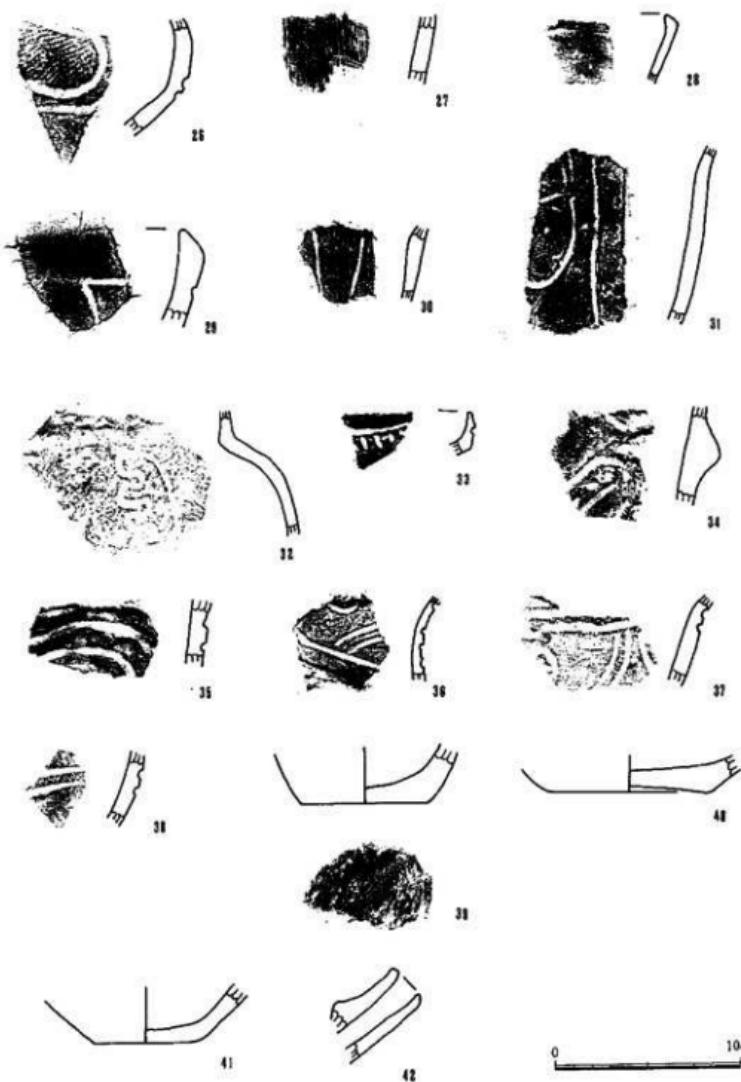
11
12

13

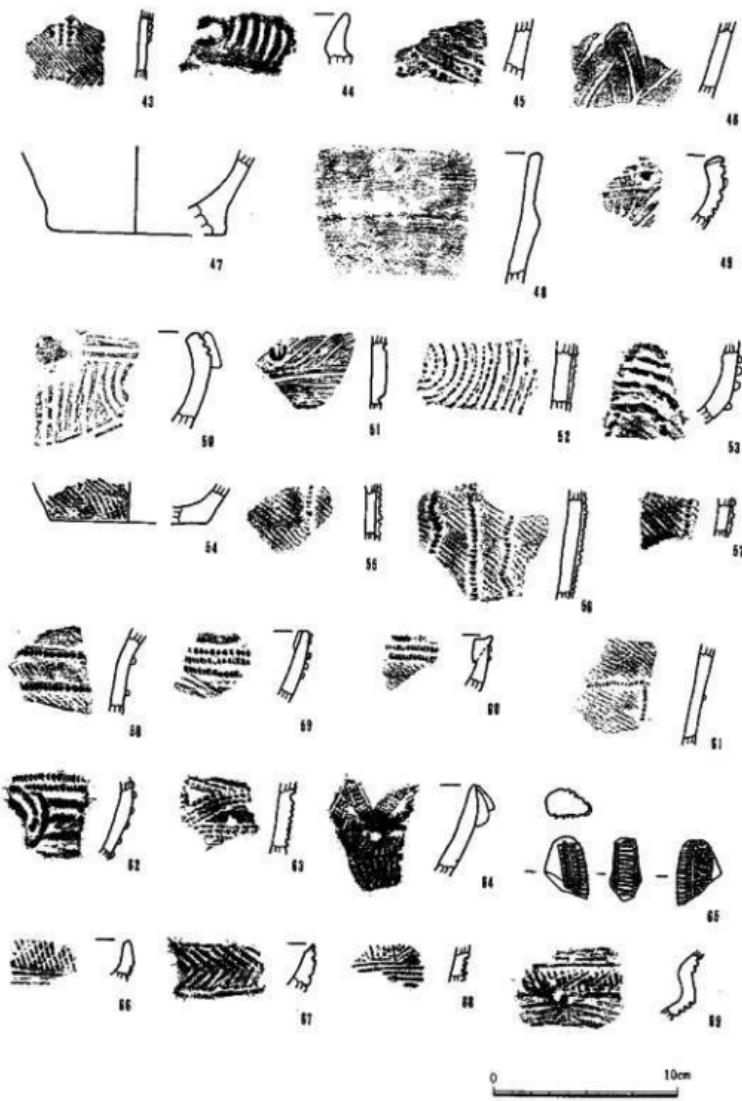
14
15

A horizontal scale bar at the bottom right of the page, labeled "10cm", indicating the size of the fragments shown above it.

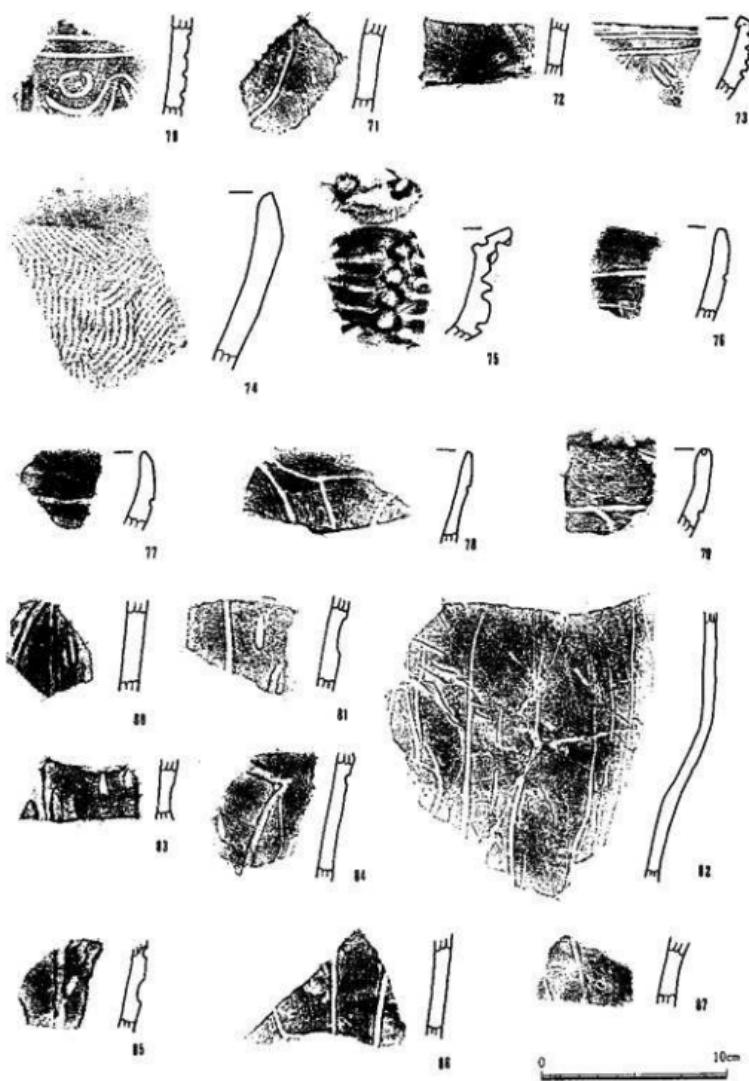
第29図 繩文土器(4)(1/3)



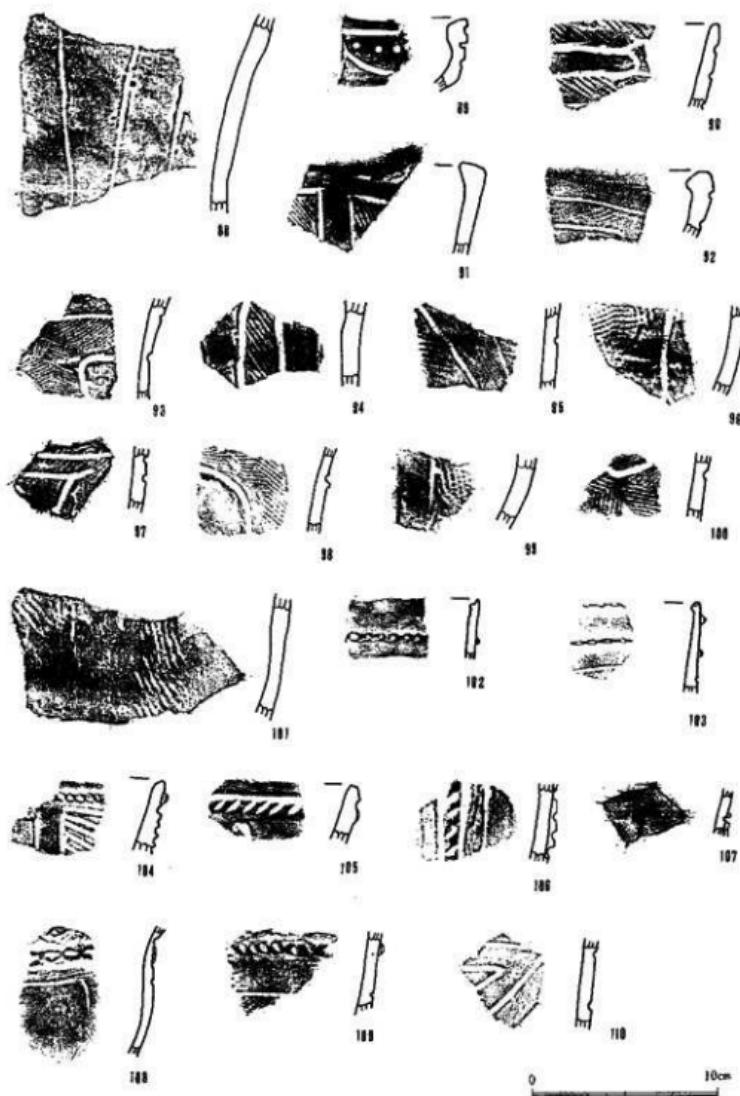
第30図 横文土器(5)(1/3)



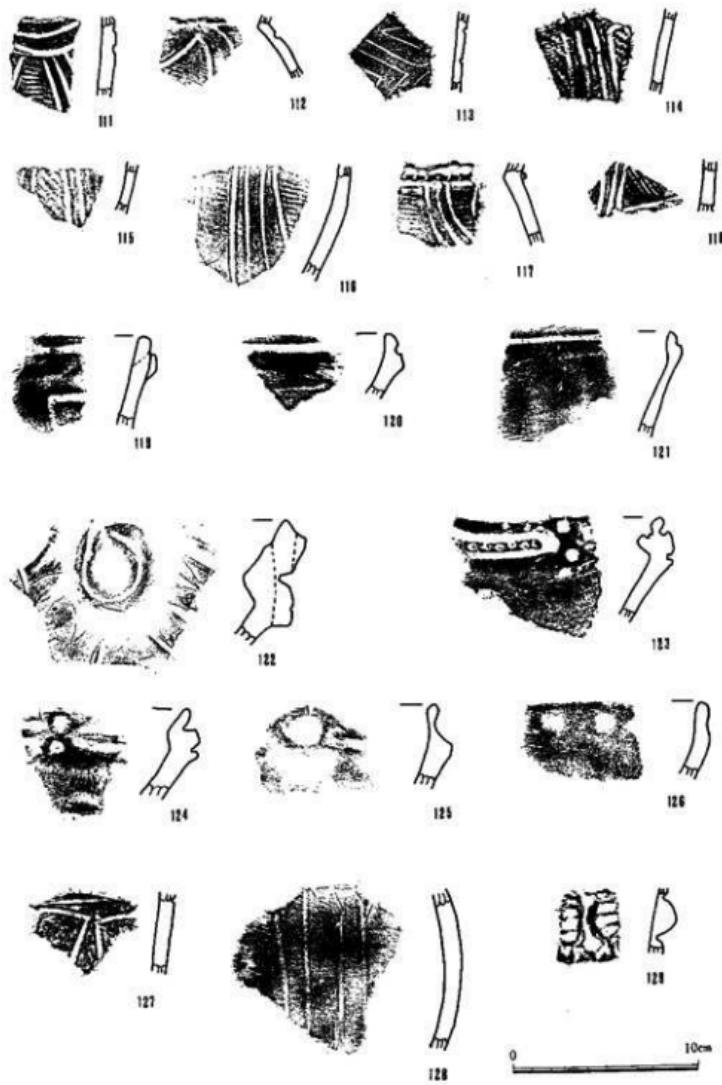
第31図 繩文土器(6)(1/3)



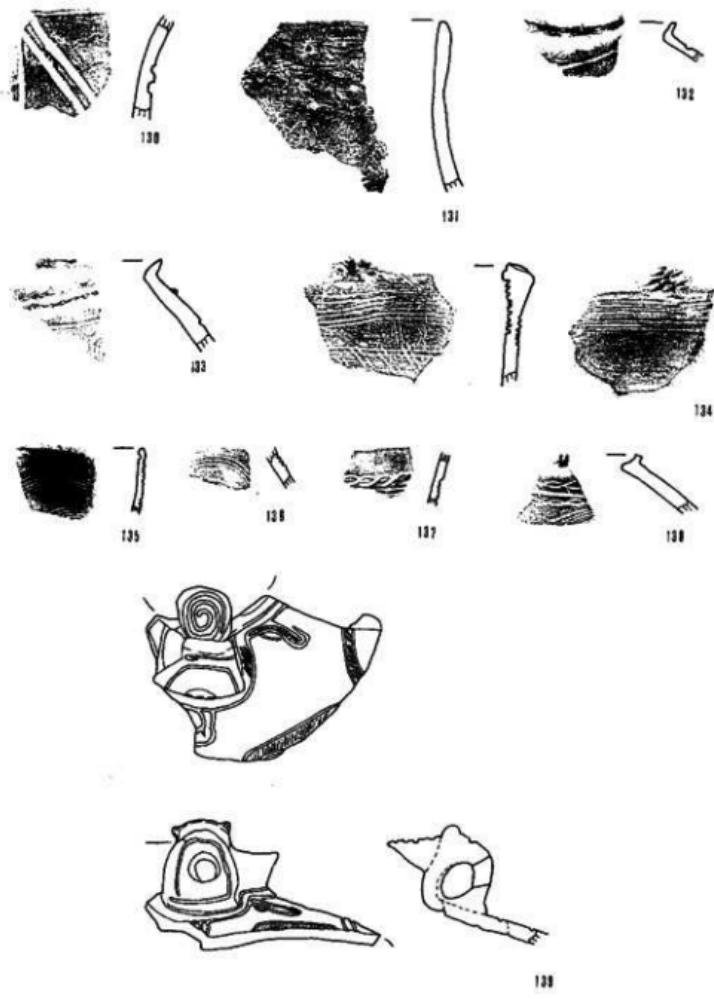
第32図 繩文土器(7)(1/3)



第33図 縄文土器(8)(1/3)

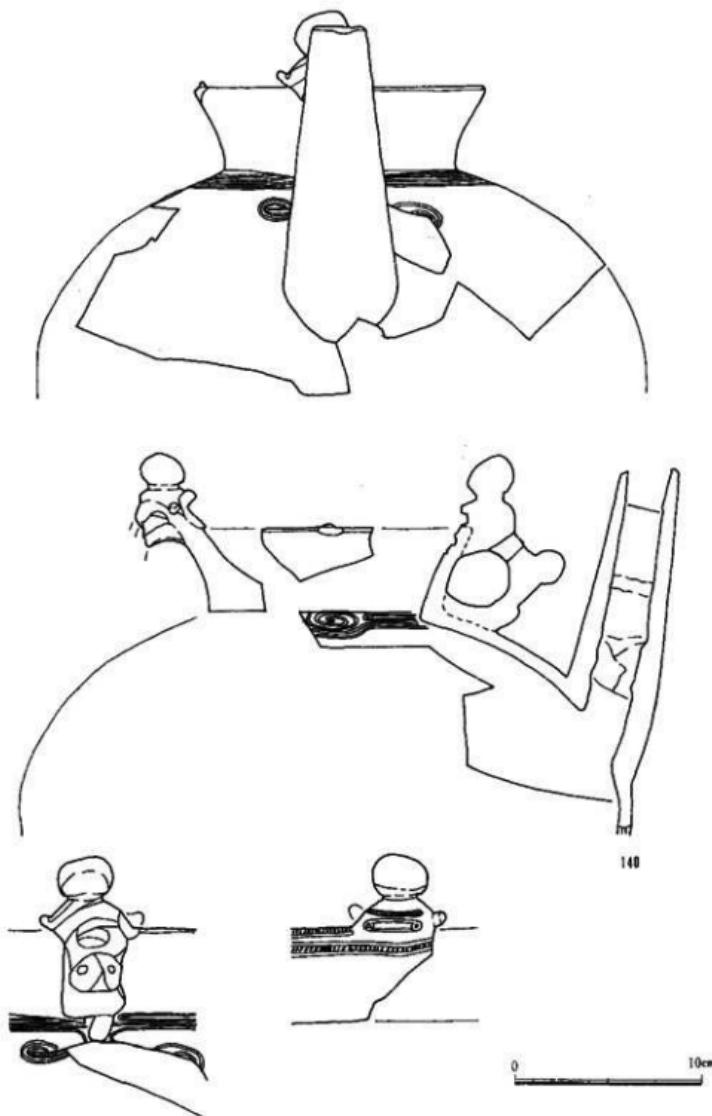


第34図 繩文土器(9)(1/3)



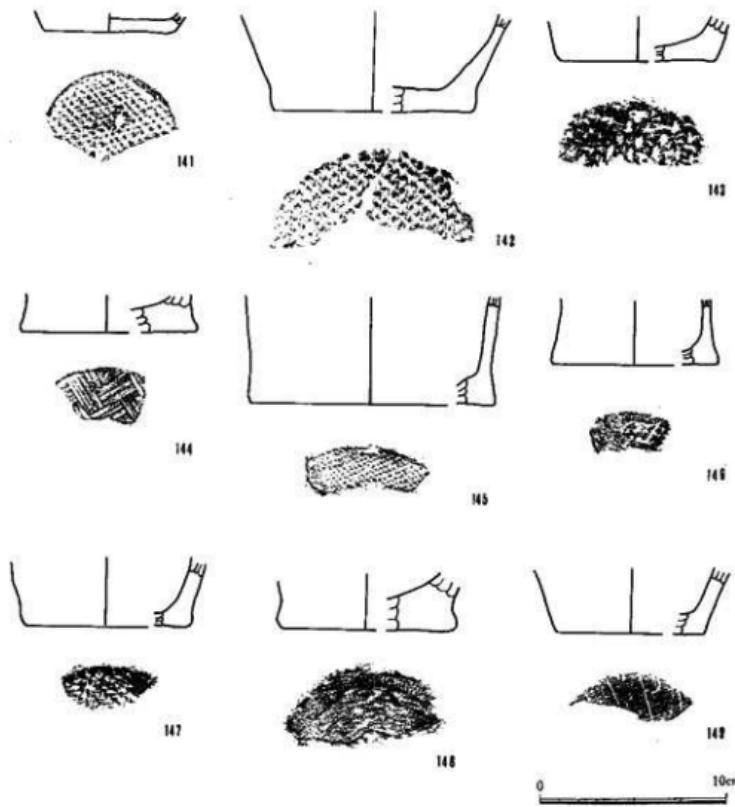
0 10cm

第35図 繩文土器(1)(1/3)



第36図 縄文土器(1)(1/3)

中期末葉と考えられるが、沈線文による口縁部である。全体的に遺物の出土数が少なく、10点にも満たない。



第37図 繩文土器(1/3)

第5節 第19トレンチの遺構と遺物

3号溝（第23図）

第19トレンチ中央に位置し、北西～南東方向に溝る溝で、南東端が調査区内で立ち上がる。幅50～70cm、深さ25cmを測り、立ち上がりは、急であり、底面は平坦である。南東端の底面に長軸40cm、短軸23cm、最深38cmのビットが1つ見られた。覆土は、黒色土と褐色土の2層である。

出土遺物は、土師器片が2点出土した。

第6節 第26トレンチの遺構と遺物

4号溝（第24・31図）

当初の調査区は、2m×2mを設定し、その西壁付近に西側に伸びる落ち込みを検出し、その性格を判断するために西側に1m×2m、北側に5m×1mほど調査区を拡張した。その結果、南北に走る溝と確認できた。幅200cm、深さ44cmを測り、立ち上がりは、急であり、底面は、レンズ状を呈する。覆土は、黒褐色と褐色の2層である。

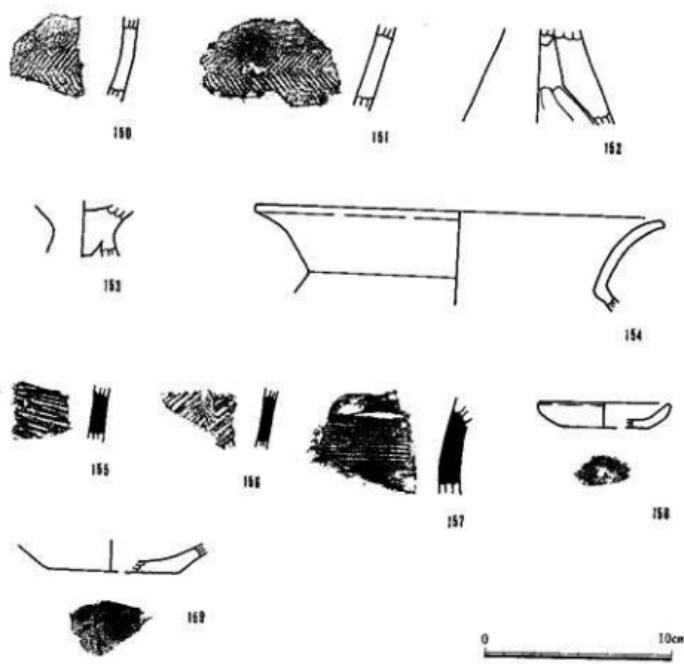
出土遺物は、45は、縄文時代前期後葉の土器で、沈線文様であり、46は、中期末葉のハの字文である。47は、縄文土器の底部で推定底径9.6cm、赤褐色を呈する。

第7節 第30トンレチの遺構と遺物

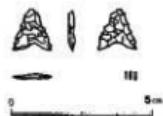
5号溝（第25・31図）

第30トレンチの東側に位置し、ほぼ南北に走る溝で、南北両側は、調査区外に伸びる。幅は、調査区南壁際では90cmだが、北壁際になると195cmと北方向に広がっていく。深さ85cmを測る。整目は、湾曲しながら立ち上がっていき、底面は、平坦である。覆土は、4層に分けられた。

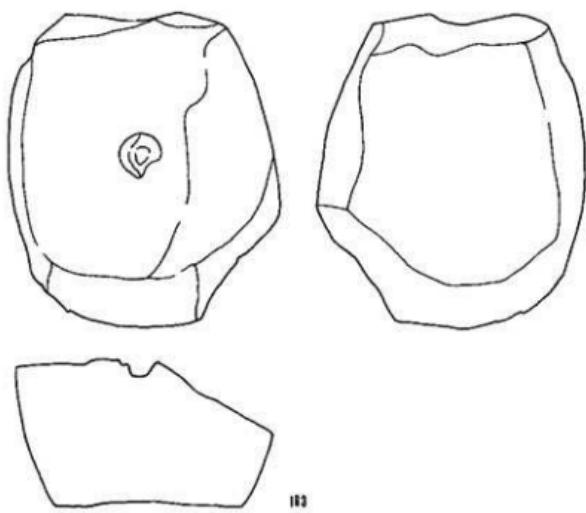
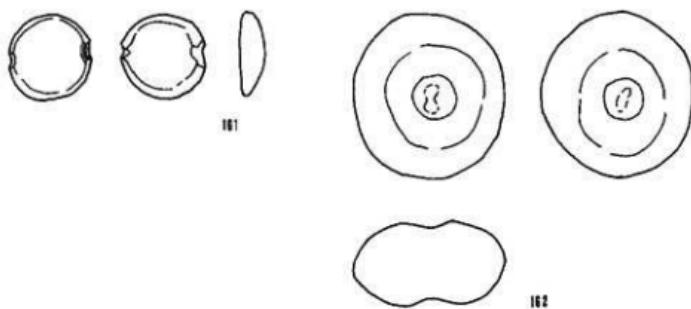
出土遺物は、48・49は、縄文時代前期後葉の土器で、48は、半載竹管による沈線で、49は、沈線文で、円形浮文が見られる。



第38図 弥生土器・土師器・須恵器・かわらけ(1/3)

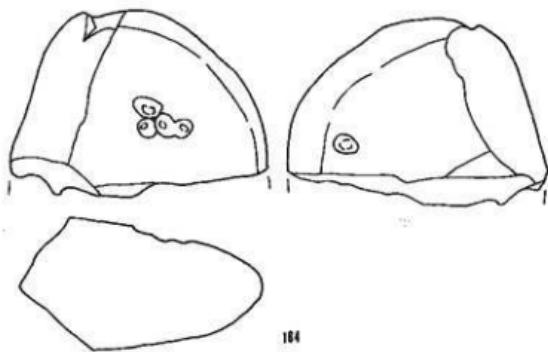


第39図 石製品(1)(1/2)

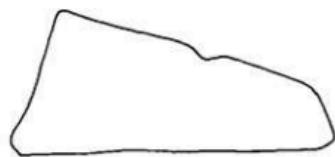
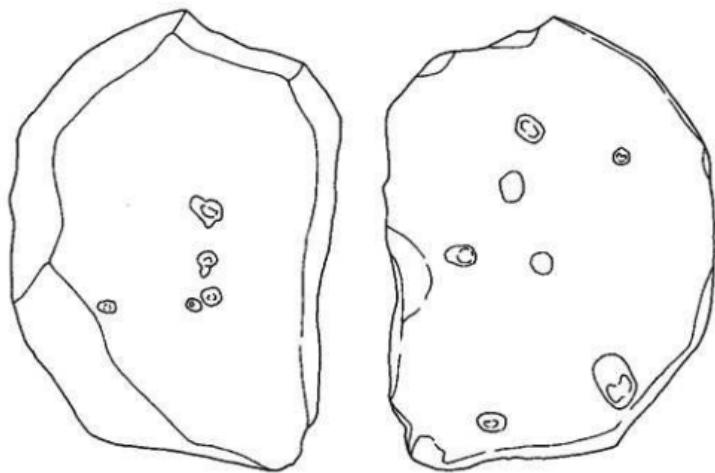


0 10cm

第40図 石製品(2)(1/3)



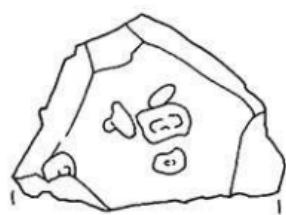
184



185



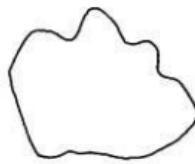
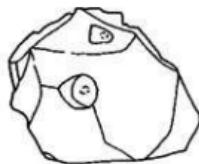
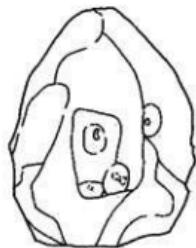
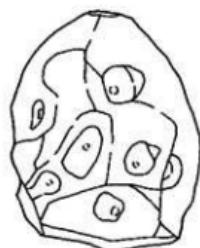
第41図 石製品(3)(1/3)



116



117



118



第42図 石製品(4)(1/3)

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	出土地	器形	法 楕 (cm)			調 整	文 横	色 調	焼 成	胎 土	備 考
			口 径	底 径	器 高						
1	2号上坑	注口土器	7.4	6.6	14.2		多重沈線文	黒褐色	良好	雲母	後期小葉
2	"		12.6	10.0	16.9		沈線文	褐色	"	白色粒	"
3	"						刻目凸唇 沈線区面内に繩文LR	"	"	砂粒	後期前葉
4	"				11.2		無文	橙褐色	"	"	
5	1号住居址						横走沈線	褐色	"	雲母	後期前葉
6	"						沈線区面内に繩文LR	橙褐色	"	砂粒	"
7	"						沈線区面内に繩文LR	"	"	雲母	"
8	16号小穴			12.0			無文	"	"	石粒	
9	"						沈線文	褐色	"	白色石粒	後期前葉
10	3号上坑						結節状隆縫文	"	"	雲母	中期末葉
11	"						集合沈線文	"	"	金色雲母	中期初頭
12	"						刻目凸唇	橙褐色	"	砂粒	後期前葉
13	"			3.4			無文	"	"	白色石粒	
14	4号土坑						沈線区面内に繩文	"	"	砂粒	後期初頭
15	"						沈線区面内に繩文	赤褐色	"	"	"
16	2号溝						繩文地に結節状隆縫文	橙褐色	"	"	前期末葉
17	"						隆縫区面にハの字文	"	"	"	中期末葉
18	"						列点文	薄褐色	"	"	後期初頭
19	"						沈線文	褐色	"	雲母	"
20	"						沈線文	橙褐色	"	砂粒	"
21	"						横走沈線	赤褐色	"	"	後期前葉
22	"						横走沈線	褐色	"	白色粒	"
23	20号小穴		27.0				半截竹管による沈線文	橙褐色	"	砂粒	"
24	"		32.0				半截竹管による沈線文	"	"	"	"
25	22号小穴						沈線に円形刺突文	"	"	雲母	後期初頭

第1表 出土遺物觀察表(2)

番号	出土地	器形	法量 (m)			調 整	文 樣	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
26	6号土坑						横円区画内に縄文LR	褐色	良好	砂 粒	中期末葉
27	"						繩文状工具による沈縁	橙褐色	*	白色 粒	"
28	"						無文	赤褐色	*	白色 粒	後期初頭
29	"						沈縁文	橙褐色	*	砂 粒	"
30	"						沈縁文	褐色	*	雲 母	"
31	"						沈縁文	"	"	砂 粒	"
32	"						縄文地に沈縁文	"	"		"
33	"						列点文	"	"	砂 粒	後期前葉
34	"						円形刺突文	橙褐色	"	"	"
35	"						沈縁文	褐色	"	金色雲母	"
36	"						沈縁文	"	"	砂 粒	"
37	"						沈縁文	"	"	"	"
38	"						沈縁区画内に縄文LR	赤褐色	*	白色 粒	"
39	"		7.0				無文	褐色	*	砂 粒	
40	"		8.6				無文	橙褐色	*	"	
41	"		6.0				無文	"	"	"	
42	"	注口土器						"	"	"	
43	7号土坑						条縁地に結節状隆線文	"	"	"	前期末葉
44	"						沈縁文	"	"	"	中期末葉
45	4号溝						沈縁文	赤褐色	*	金色雲母	前期後葉
46	"						八の字文	橙褐色	*	砂 粒	中期末葉
47	"		9.6				無文	赤褐色	*	白色 粒	
48	5号溝						半載竹管による沈縁文	褐色	*	雲 母	前期後葉
49	"						沈縁文	橙褐色	*	白色 粒	"
50	T --- 1						縄文地に半載竹管による沈縁文	"	"	砂 粒	"

第1表 出土遺物観察表(3)

番号	出土地	器形	法寸(m)			調 整	文 横	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
51	T — 2						沈縁文に円形浮文	褐色	良好	雲母	前期後葉
52	"						結節状隆線文	"	"	砂粒	"
53	T — 4						縄文地に結節状隆線文	橙褐色	"	"	"
54	T — 2		8.4				縄文RL	赤褐色	"	"	前期末葉
55	"						縄文RLに結節状隆線	橙褐色	"	白色粒	"
56	"						縄文RLに結節状隆線	"	"	雲母	"
57	"						縄文RLに結節状隆線	"	"	"	"
58	"						縄文RLに結節状隆線	"	"	"	"
59	"						縄文RLに結節状隆線	褐色	"	"	"
60	T — 3						縄文RLに結節状隆線	橙褐色	"	砂粒	"
61	"						縄文RLに結節状隆線	赤褐色	"	雲母	"
62	"						結節状隆線	褐色	"	金色雲母	"
63	"						結節状沈縁に三角文	橙褐色	"	"	"
64	"						結節状沈縁に三角文	褐色	"	雲母	"
65	"						結節状沈縁と微隆線の 胎土貼り付け	赤彩	"	白色粒	"
66	T — 2						集合沈縁文	赤褐色	"	金色雲母	中期初頭
67	T — 3						集合沈縁文	"	"	雲母	"
68	T — 2						集合沈縁文	"	"	金色雲母	"
69	"						集合沈縁文	褐色	"	砂粒	"
70	T — 4						縄文地に沈縁文	橙褐色	"	金色雲母	"
71	T — 5						綾杉文	"	"	砂粒	中期末葉
72	"						櫛齒状工具による沈縁	"	"	"	"
73	T — 6						ハの字文	"	"	雲母	"
74	T — 3						縄文	"	"	白色石粒	中期末葉- 後期初頭?
75	T — 2						円形刺突文の両側に沈 縁文	"	"	砂粒	後期初頭

第1表 出土遺物觀察表(4)

番号	出土地	器形	法量 (m)			調 整	文 横	色調	焼成	胎土	備 考
			口径	底径	高さ						
76	T — 2						沈線文	褐色	良好	砂 粒	後部切頭
77	"						沈線文	褐色	"	雲 母	"
78	"						沈線文	赤褐色	"	"	"
79	T — 3						沈線文	白褐色	"	白色 粒	"
80	T — 2						列点文	褐色	"	"	"
81	"						列点文	"	"	白色石粒	"
82	"						列点文	"	"	砂 粒	"
83	T — 3						列点文	"	"	雲 母	"
84	T — 5						列点文	橙褐色	"	"	"
85	"						列点文	"	"	白色 粒	"
86	T — 2						沈線文	褐色	"	雲 母	"
87	"						沈線文	"	"	砂 粒	"
88	"						沈線文	"	"	"	"
89	T — 3						沈線文に円形刺突文	橙褐色	"	"	"
90	T — 2						繩文R Lに沈線文	褐色	"	雲 母	"
91	"						沈線区面内に繩文R L	赤褐色	"	白色 粒	"
92	T — 5						沈線区面内に繩文R L	橙褐色	"	砂 粒	"
93	T — 2						沈線区面内に繩文	"	"	"	"
94	"						沈線区面内に繩文R	"	"	"	"
95	"						沈線区面内に繩文R L	褐色	"	"	"
96	"						沈線区面内に繩文	"	"	雲 母	"
97	T — 3						沈線区面内に繩文	"	"	"	"
98	"						沈線区面内に繩文	橙褐色	"	"	"
99	T — 5						沈線区面内に繩文R	"	"	白色 粒	"
100	T — 6						沈線区面内に繩文	"	"	砂 粒	"

第1表 出土遺物観察表(5)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 横	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底深	器高						
101	T — 3						縹文R	橙褐色	良好	砂 粒	後期初頭
102	T — 1						刻目凸帯	褐色	々	雲 母	後期前葉
103	"						刻目凸帯	赤褐色	々	々	々
104	T — 3						刻目凸帯	橙褐色	々	砂 粒	々
105	T — 4						横走沈線の下部に刻目 凸帯	赤褐色	々	白色 粒	々
106	T — 1						刻目隆線	橙褐色	々	雲 母	々
107	T — 3						刻目凸帯	薄褐色	々	々	々
108	"						刻目凸帯	赤 色	々	白色 粒	々
109	T — 4						刻目凸帯	灰褐色	々	雲 母	々
110	T — 1						沈線区画内に縹文	橙褐色	々	々	々
111	T — 2						沈線区画内に縹文	々	々		々
112	"						沈線区画内に縹文	褐 色	々	雲 母	々
113	T — 3						沈線区画内に縹文LR	黑褐色	々	白色 粒	々
114	々						沈線区画内に縹文RL	々	々	雲 母	々
115	々						沈線区画内に縹文RL	々	々	々	々
116	T — 5						沈線区画内に縹文RL	赤褐色	々	々	々
117	々						沈線区画内に縹文	橙褐色	々	砂 粒	々
118	々						沈線区画内に縹文RL	褐 色	々	白色 粒	々
119	々						横走沈線	赤褐色	々	々	々
120	T — 2						横走沈線	橙褐色	々	砂 粒	々
121	T — 4						横走沈線	々	々	々	々
122	々						溝巻文	々	々	々	々
123	々						8の字文	々	々	雲 母	々
124	T — 11						8の字文	褐 色	々	砂 粒	々
125	T — 4						めがね状沈線文	々	々	々	々

第1表 出土遺物観察表(6)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 横	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
126	T — 6						めがね状沈線文	橙褐色	良好	小石・雲母	後期前葉
127	T — 2						沈線文	赤褐色	〃	白色石粒	〃
128	T — 3						沈線文	〃	〃	白色 粉	〃
129	T — 4						8の字文	橙褐色	〃	〃	〃
130	T — 5						2本の平行沈線	赤褐色	〃	砂 粒	〃
131	T — 2						無文	橙褐色	〃	小石・雲母	〃
132	T — 1	注口土器					沈線区画内に繩文LR	褐色	〃	白色石粒	〃
133	〃	〃					刻目凸帯	薄褐色	〃	〃	〃
134	T — 2						沈線文	〃	〃	雲 母	後期中葉
135	〃						多重沈線	黑灰色	〃	〃	〃
136	T — 1						沈線文	橙褐色	〃	砂 粒	〃
137	T — 2						沈線文	黑灰色	〃	雲 母	〃
138	T — 1						沈線文	薄褐色	〃	〃	〃
139	〃						沈線区画内に繩文	黑褐色	〃	砂 粒	〃
140	〃						沈線文・内面は横走沈線の間に斜刻	褐色	〃	白色 粒	〃
141	T — 2		7.0				無文・底部網代痕	赤褐色	〃	砂 粒	
142	〃		10.8				無文・底部網代痕	橙褐色	〃	白色 粒	
143	〃		8.6				無文・底部網代痕	褐色	〃	〃	
144	〃		9.6				無文・底部網代痕	橙褐色	〃	砂 粒	
145	T — 3		13.4				無文・底部網代痕	赤褐色	〃	白色 粒	
146	〃		9.0				無文・底部網代痕	橙褐色	〃	砂 粒	
147	T — 11		9.0				無文・底部網代痕	赤褐色	〃	雲 母	
148	T — 12		9.6				無文・底部網代痕	橙褐色	〃	白色石粒	
149	T — 3		8.0				無文・底部木柴痕	〃	〃	砂 粒	
150	〃	弥生土器 壺					羽状繩文	赤 彩	〃	白色石粒	

第1表 出土遺物観察表(7)

番号	出土地	器形	法寸(寸)			調 整	文 標	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
151	T — 3	弥生土器 蓋					羽状翼文	赤 彩	良好	芸母	
152	T — 4	土師器 台付 蓋				ナデ		棕褐色	夕	白色 粒	
153	T — 29	土師器 環 高				ヘラナデ		夕	夕	芸母	
154	T — 3	土師器 蓋				ヨコナデ		夕	夕	砂 粒	
155	T — 4	須恵器 蓋				タタキ		灰 色	夕	緻 密	
156	T — 4	須恵器 蓋				タタキ		夕	夕	夕	
157	T — 15	須恵器 蓋				タタキ		暗灰色	夕	夕	
158	T — 5	かわらけ				ナデ・底部糸切痕		棕褐色	夕	金色芸母	
159	T — 29	かわらけ				ナデ・底部糸切痕		夕	夕	砂 粒	
160	T — 2	石 磚				長 1.4cm 幅 1.4cm 厚 0.2cm					黑 磁 石
161	夕	石 鍤				長 4.5cm 幅 4.5cm 厚 1.3cm					
162	夕	凹 石				長 8.9cm 幅 8.1cm 厚 4.4cm					安 山 岩
163	夕	凹 石				長 16.8cm 幅 14.2cm 厚 7.6cm					凝灰岩
164	夕	凹 石				長 10.0cm 幅 13.0cm 厚 7.0cm					安 山 岩
165	夕	凹 石				長 24.8cm 幅 17.5cm 厚 7.8cm					凝灰岩
166	T — 3	凹 石				長 10.0cm 幅 14.5cm 厚 6.0cm					安 山 岩
167	夕	凹 石				長 11.4cm 幅 6.9cm 厚 4.5cm					安 山 岩
168	6号土坑	凹 石				長 12.9cm 幅 10.0cm 厚 8.2cm					凝灰岩

第V章　まとめ

今回の調査地は、遺跡推定範囲の北側を中心にトレントを設定して、遺跡有無の確認を行った。

今回の調査では、竪穴住居址1軒、土坑7基、溝5条、小穴24基、性格不明遺構1基が確認された他、表土や耕作土から縄文時代前期後葉から後期中葉にかけての土器片が多数出土した。

遺構の時期決定については、覆土中に土器が混じっているものの出土数が少なく、混入物の可能性もあり、明らかに時期が判定できるものについて示すと、次の通りである。

縄文時代

1号住居址（後期前葉）、2号土坑（後期前葉～中葉）、6号土坑（後期初頭～前葉）、20号小穴（後期前葉）

古墳時代

3号土坑（前～中期）、2号溝（前～中期）

第1節　縄文時代について

1号住居址としたものは、平面プランや規模詳細不明な点が多く、炉の検出もできなかった。しかし、底面が平坦であり、また、小ピットもいくつか見られるなど、住居址を推定させる要素がいくつかあり、今回は、これを竪穴住居址として扱うこととした。時期については、土器の出土量が少ないのだが、後期前葉の堀之内式土器の出土があり、遺構の時期もこの頃とした。

2号土坑の検出は、今回の調査の中で大きな成果であった。2号土坑出土で、とりわけ特筆されるのは、完形の注口土器が出土したという点である。第4章の中でも書いたように、注口部と把手の一部をわざわざ土器内に納めていたこと、注口土器という器種の特殊性等から考えて、何らかのまつりに注口土器とその横から出土した深鉢が使われ、まつりの終了後、土坑内に埋めたことが1つの可能性として推定できる。しかし、これは、あくまでも推定であって、確証がないのが現状である。ただし、同じ1号トレント内で見つかった同一時期と思われる大型の有頸注口土器の存在など、いずれにしても、注口土器を用いた当時の生活習慣が窺えるが、これがハレの行為なのかケの行為なのかは、今のところ不明である。また、注口土器の時期についても、今回は、縄文時代後期中葉の加曾利B式土器とした。その理由として、文様を見ると、全体的に多重沈線による齊一性の強い渦巻文が施され、この文様は、これまでの研究によると、加曾利B式土器の範疇に入れている例が多いため、今回もそれにならった。ただし、研究者によっては、後期前葉まで遡って考えている人もあり、後期前葉から中葉にかけての微妙な時期の製作といえよう。今回の土坑からの出土で、注口土器の使用後の扱い方をめぐる、その1つの例を明らかにすることができたのは、大きな成果であった。

第2節 古墳時代について

2号溝は、第IV章で述べた通り、その形状から古墳の周溝としてとらえた。宇山平一帯は、宇山平古墳群と呼ばれ、全長61.2mの帆立貝式古墳の王塚古墳をはじめ、かつて、小円墳が点在していたが、現在は、耕作のため、墳丘が残された古墳は、王塚古墳と伊勢塚古墳ぐらいで、あとは、消滅しているのが現状である。これまでの調査でも古墳の周溝と思われる溝跡が数か所確認されており、古墳群の一端が解明されつつある状況である。

また、特徴ある遺物の出土が見られた遺構に3号土坑がある。遺構の北壁に近い覆土上層のところに、古墳時代前～中期の土器類の壺形土器と思われる胴部の破片を皿代わりに白色の比較的良質の粘土が500gほど載せられ、その上に蓋代わりに同一個体の胴部の破片が覆いかぶせられた状態で出土した。その粘土を例えば、土器作り用として保管していたものなのか、何らかの儀式の供獻品なのか、遺構の性格とも関連してくることだが、大半が調査区外にあるために現段階では、不明といわざるをえない。この粘土は、山梨県内では、あまり見られないものであり、他地域から運ばれた可能性が高い。なお、これ以外に時期がわかるような遺物は、出土していない。

引用・参考文献

- 松平定能編 文化11年(1814)『甲斐国志』(佐藤八郎他校訂『甲斐国志』大日本地誌大系44~48)
- 森和敏他 1973 『金川曾根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』 山梨県教育委員会
- 山梨県教育委員会 1977 『笛吹川沿岸土地改良事業地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
- 小野正文 1986 『积迦堂I』 山梨県教育委員会
- 小野正文 1987 『积迦堂II』 山梨県教育委員会
- 保坂康夫 1987 『横堀遺跡・赤二郎遺跡』 山梨県教育委員会
- 小林公明他 1988 『唐渡宮』 長野県富士見町教育委員会
- 新津 健 1989 『金生遺跡II(縄文時代編)』 山梨県教育委員会
- 長沢宏昌 1989 『花鳥山遺跡・水呑場遺跡』 山梨県教育委員会
- 池谷信之 1990 『網取・堀之内型注口土器』『縄文時代』1
- 西田泰民 1992 『縄文土瓶』『古代学研究所研究紀要』2
- 市立市川考古博物館 1992 『堀之内貝塚資料図譜』
- 阿野秀典 1993 『高部字山平遺跡』 豊富村教育委員会
- 秋田かな子 1994 「加曾利B1式注口土器の成立(予察)ー王子ノ台遺跡出土の注口土器からー」
『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査団



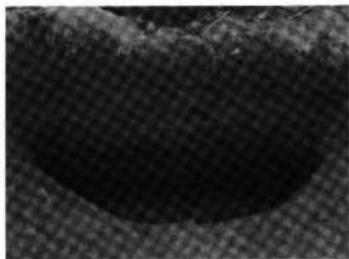
調査前風景(第1～3トレンチ付近)



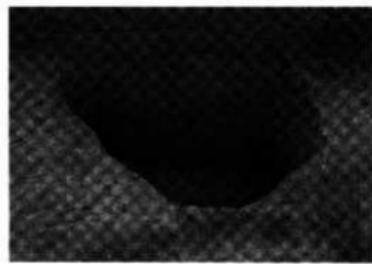
作業風景



1号住居址



1号土坑



2号土坑

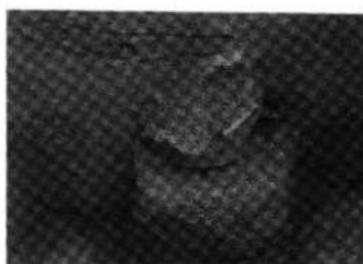


2号土坑土器出土状況(1)

図版
2



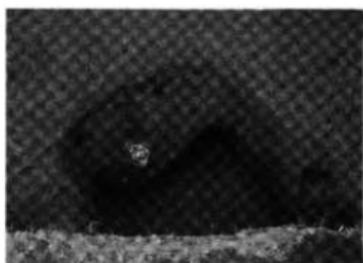
2号土坑土器出土状況(2)



2号土坑土器出土状況(3)



第2トレンチ小穴群



3号土坑



3号土坑土器出土状況(1)



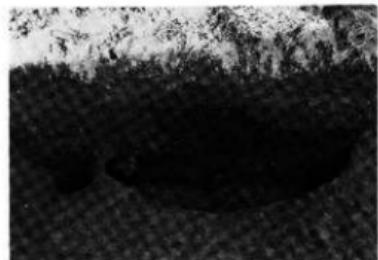
3号土坑土器出土状況(2)



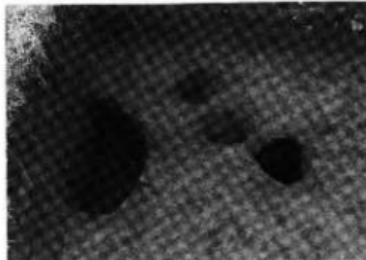
2号溝



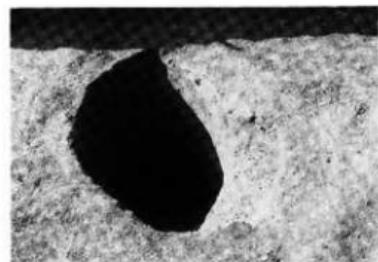
20号小穴



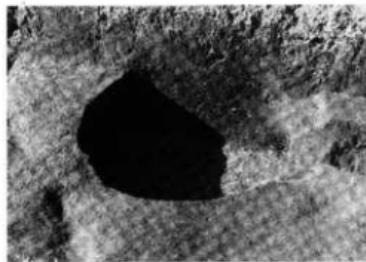
4号土坑·21号小穴



5号土坑·22~24号小穴



6号土坑



7号土坑



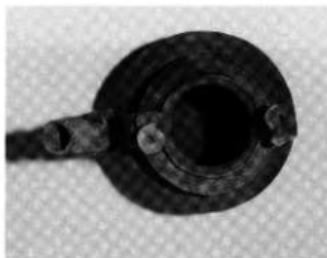
(侧面)



(正面)



(背面)



(上面)

2号土坑出土土器(1)



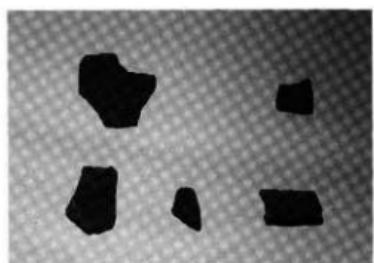
2号土坑出土土器(2)



2号土坑出土土器(3)



20号小穴出土土器



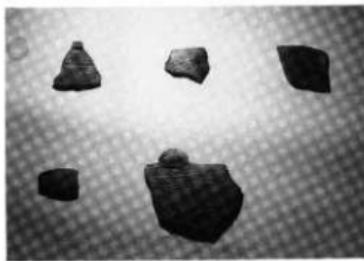
縄文土器(1)



縄文土器(2)



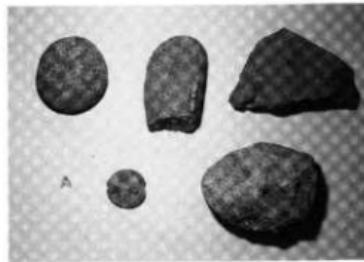
縄文土器(3)



縄文土器(4)



縄文土器(5)



石製品

ASARISI YAKATAATO

浅利氏館跡

1. 調査組織

調査主体 豊富村教育委員会
調査担当者 岡野秀典
事務局 萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・飯室隆人（社会教育係長）・
今井賢・井上妙・河野義男・鶴見貴美恵
調査参加者 初鹿駿・清野静子

2. 調査経緯

平成6年10月3日 文化庁に発掘届提出
平成6年10月18日 発掘調査を開始
平成6年10月19日 発掘調査終了

3. 遺跡の概要と層位

東八代郡豊富村浅利字七倉に所在し、曾根丘陵を形成する小字田見堂の台地東側の傾斜部分にあるテラス状の平坦地に立地する。

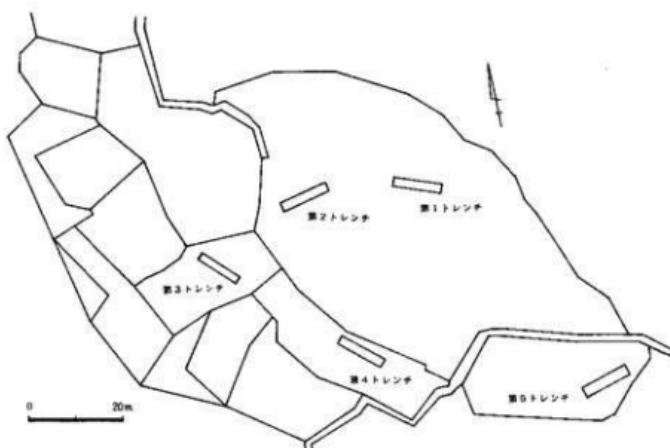
『甲斐国志』に、小字七倉に源平合戦で活躍した甲斐源氏浅利与一義成の船跡があったと伝わる、との記載があるが、当地に宅地開発の計画が上がり、村教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。調査面積は、約100m²である。

調査方法は、調査対象地に応じて任意に2×10mのトレンチを5か所設定して掘り下げた。本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

第I層 褐色土（表土） 第II層 褐色粘質土（地山） 第III層 褐色砂質土（地山）

4. 検出された遺構と遺物

調査の結果、人為的な遺構・遺物は、出土しなかった。



第1図 第1～5トレンチ全体図 (1/1200)



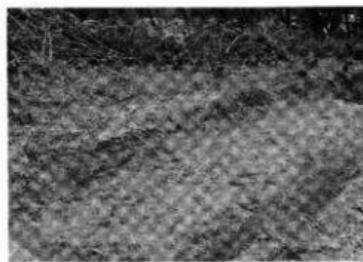
調査前風景



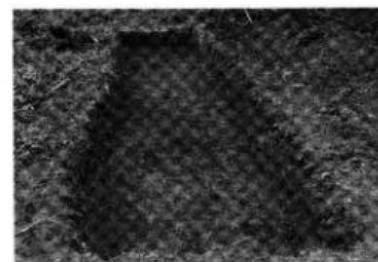
調査前風景



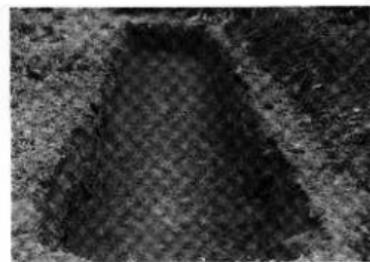
作業風景



第1トレンチ



第4トレンチ



第5トレンチ

SAIGUSASI YAKATAATO

三枝氏館跡

1. 調査組織

調査主体 豊富村教育委員会
調査担当者 岡野秀典
事務局 萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・飯室隆人（社会教育係長）・
今井賢・井上妙・河野義男・鶴見貴美恵
調査参加者 石原喜代の・岩波幸子・塙田よ志江・角田美代子・萩原津た子

2. 調査経緯

平成7年1月4日 文化庁に発掘届提出
平成7年2月6日 発掘調査を開始
平成7年2月16日 発掘調査終了

3. 遺跡の概要と層位

東八代郡豊富村木原字高内に所在し、曾根丘陵を形成する小字高内の尾根状の先端に立地する。

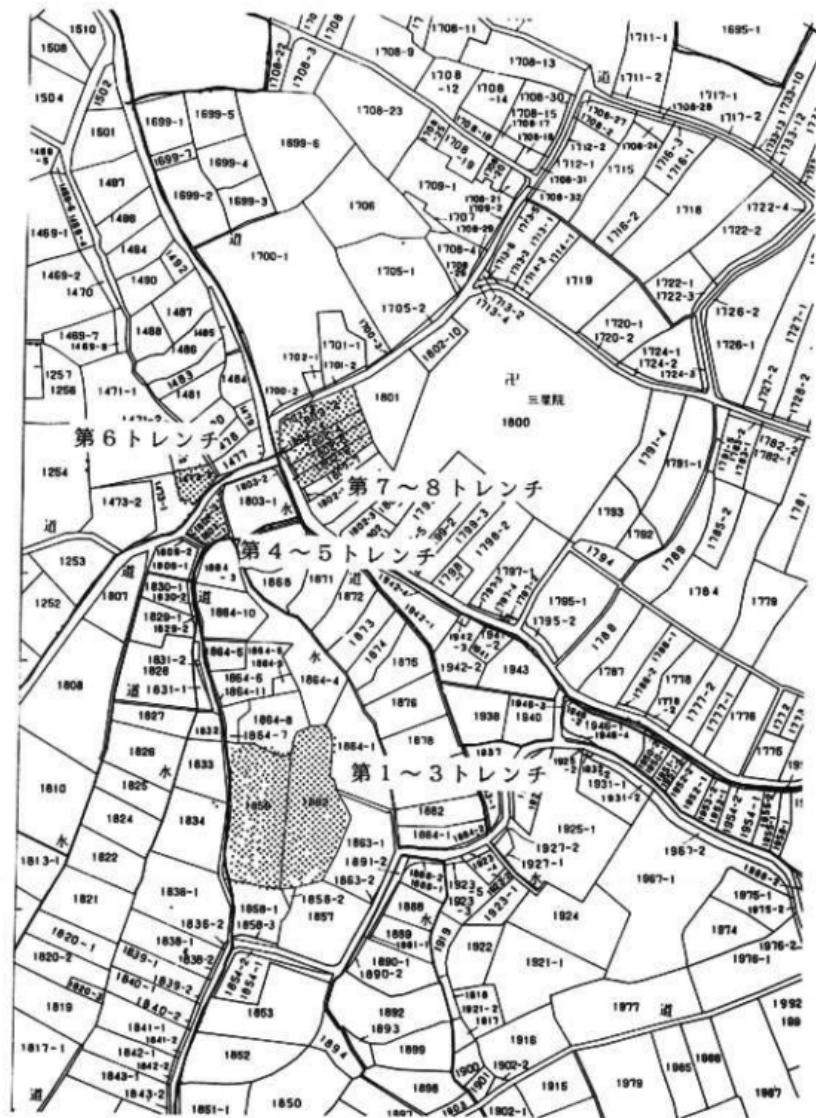
当地は、『甲斐国志』により、三枝土佐守虎吉の館跡とされる。三枝土佐守虎吉は、武田家に仕え、足軽大将・侍大将をつとめていたが、武田家滅亡後は、徳川家康に従った人物である。この館跡は、北沼と称される堀代わりとなるような湿地がめぐり、現在、畑地となっている。この付近の畑地において、住宅または倉庫建設の予定があり、村教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。調査面積は、約100m²である。

調査方法は、調査対象地に応じて任意2×2～9mのトレーニチを8か所設定して掘り下げた。本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

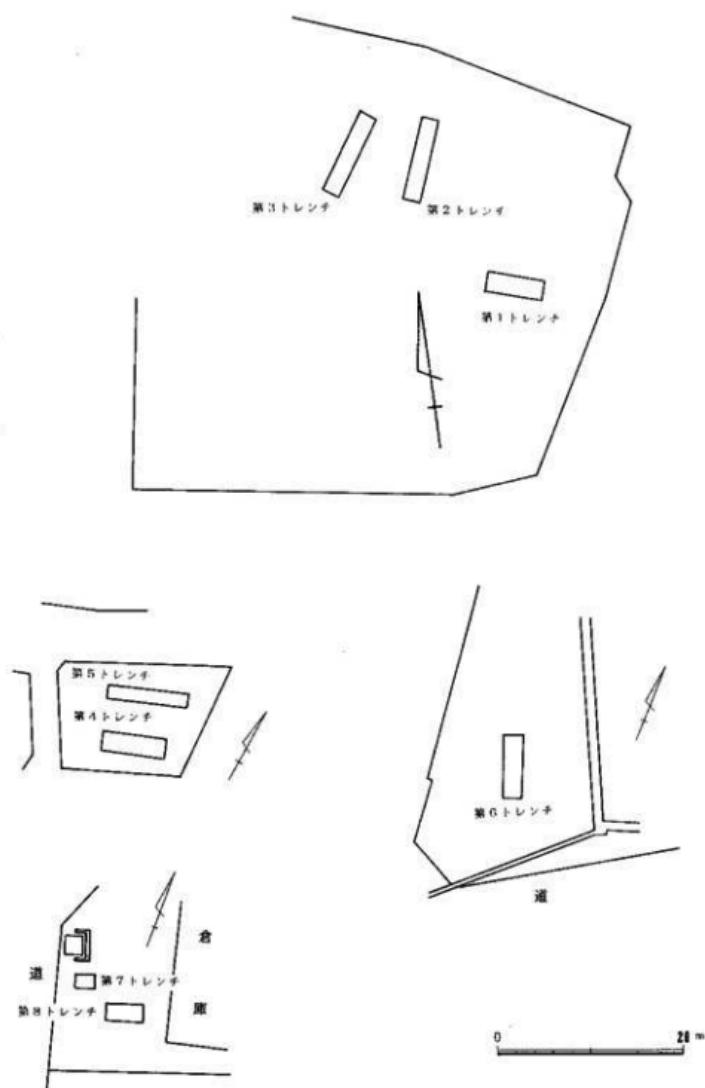
- 第I層 暗色土（耕作土）
- 第II層 灰褐色土（盛土）
- 第III層 褐色土（旧耕作土）
- 第IV層 灰褐色土（旧耕作土）
- 第V層 黄褐色ローム（地山）
- 第VI層 黄色土（地山）
- 第VII層 白色粘土（地山）
- 第VIII層 岩盤（地山）

4. 検出された遺構と遺物

調査の結果、人為的な遺構・遺物は、出土しなかった。



第1図 調査区位置図 (1/2,500)



第2図 第1～8トレンチ全体図 (1/600)



調査前風景（第1～3トレンチ付近）



作業風景



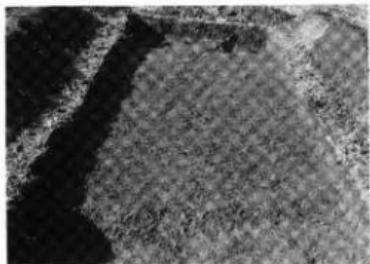
第1トレンチ



第2トレンチ



第4トレンチ



第6トレンチ

平成 5 年度高部宇山平遺跡の調査

1. 調査組織

調査主体 豊富村教育委員会
調査担当者 岡野秀典
事務局 萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・飯室隆人（社会教育係長）・
今井賢・井上妙・河野義男・鶴見貴美恵
調査参加者 有泉日那代・飯室めぐみ・石原次代・石原花子・田中好子・殿岡常雄・
中沢 清・福田洋子・米山苗美

2. 調査経緯

平成 5 年 9 月 24 日 文化庁に発掘届提出
平成 5 年 10 月 5 日 発掘調査を開始
平成 5 年 12 月 21 日 発掘調査終了
平成 5 年 12 月 22 日 南甲府警察署に遺物発見届を提出

3. 遺跡と概要と層位

東八代郡豊富村高部字宇山
平地に所在し、調査地は、高
部 1405～1426-1 にかけての
遺跡推定範囲の東側、台地北
東部の傾斜地である。

調査方法は、調査対象地に応じて任意に幅 1～3 m、長さは、3～20m のトレンチを 32か所設定して掘り下げた。なお、今回の調査は、国・県からの補助を受けて行われた。調査面積は、474m²である。

本地点の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層 褐色土層	第Ⅳ層 黒褐色土層
第Ⅱ層 黄褐色土層	第Ⅴ層 黄褐色ローム層
第Ⅲ層 暗褐色上層	

4. 検出された遺構と遺物

（1）第 2 トレンチ

1 号性格不明遺構（第 2・13・15 図）

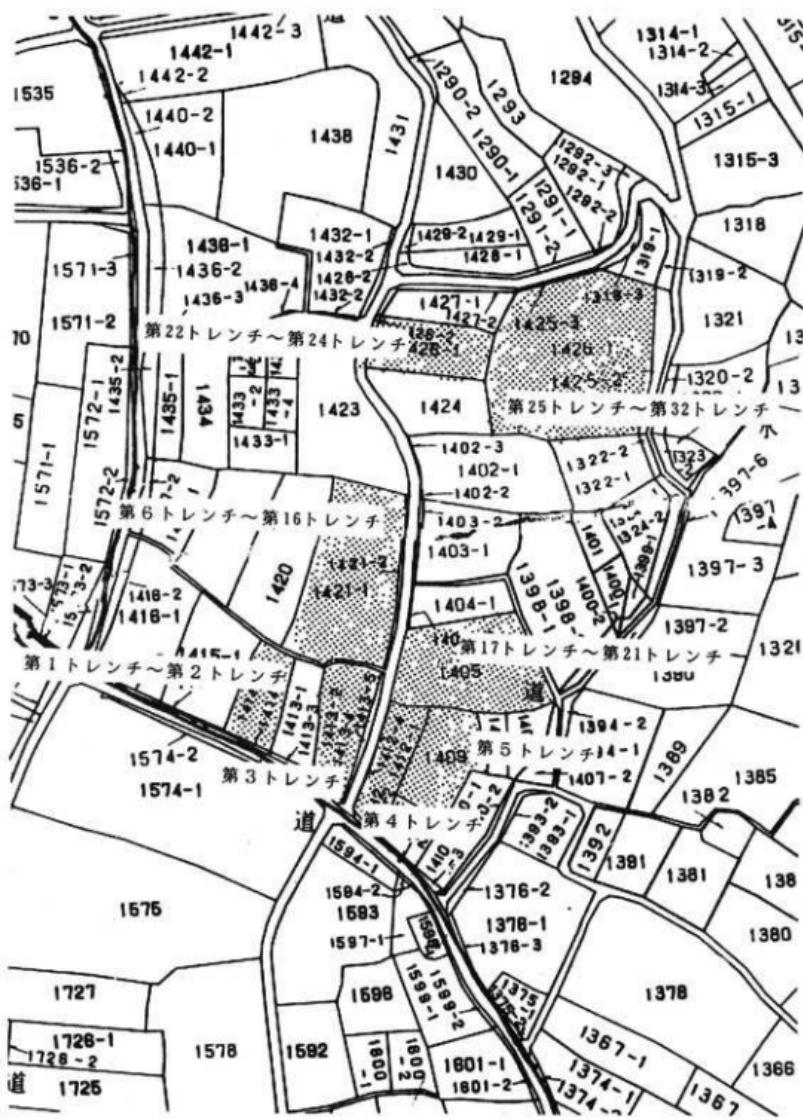
調査区北端に位置し、平面プランは、大部分が調査区外のため、不明である。深さは、約 40 cm である。立ち上がりは、緩やかで、底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物は、縄文時代前期末葉や後期前葉の土器、また、蛇紋岩を磨いて作られた石斧状石製品がある。

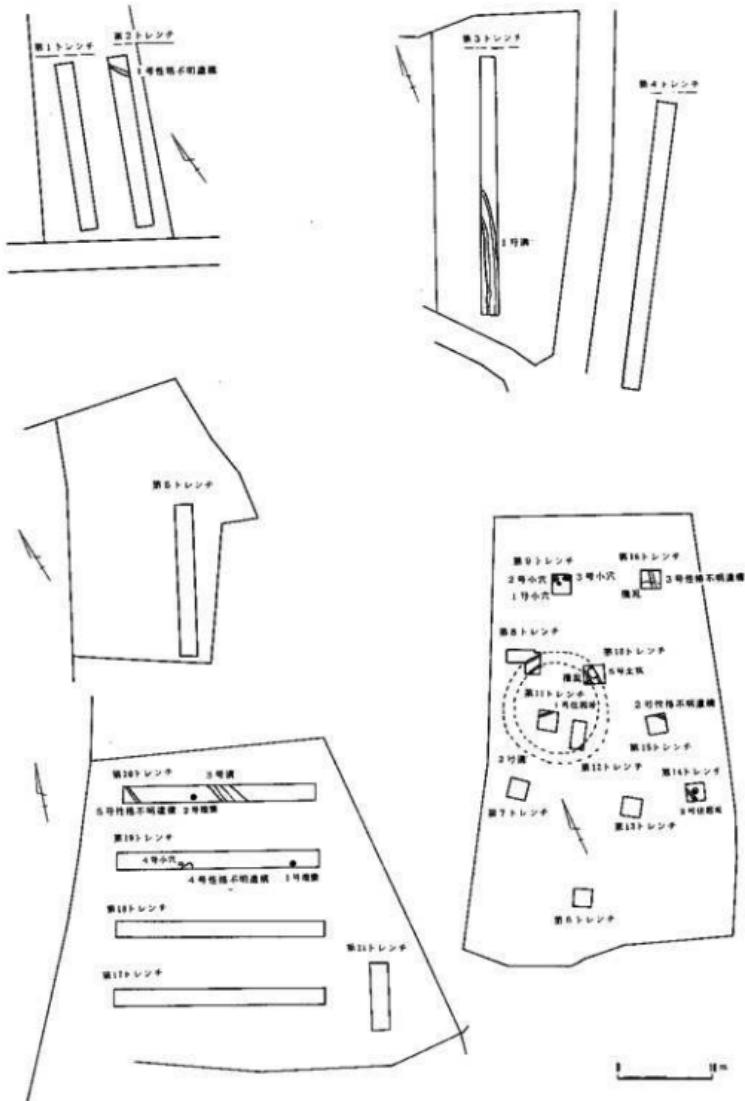
（2）第 3 トレンチ

1 号溝（第 2 図）

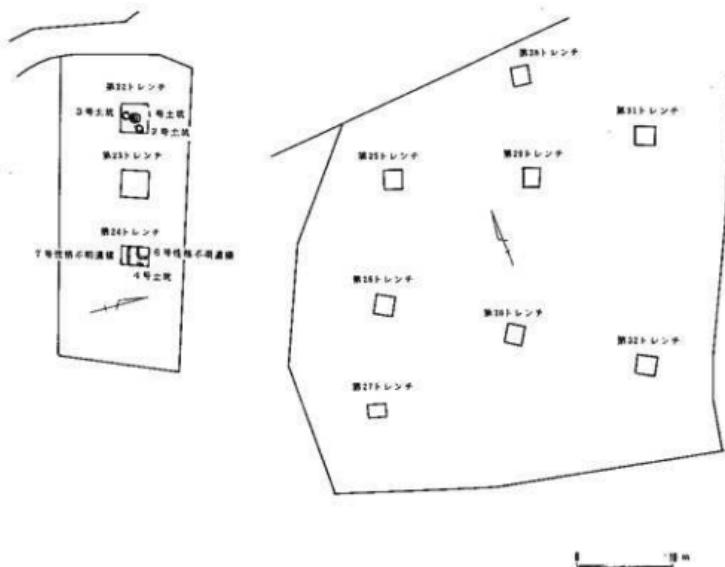
調査区の南半分を占め、南北方向を流れる溝である。幅は、120cm、長さは、13m まで確認



第1図 調査区位置図 (1/1,500)



第2図 第1~21トレーニチ全体図 (1/600)



第3図 第22~32トレンチ全体図 (1/600)

できた。深さは、20cmである。立ち上がりは、緩やかで、底面は、ほぼ平坦である。覆土は、褐色土である。

出土遺物はなく、覆土の土質を見ても、それほど古いものとは、思われない。

(3) 第8・10・12トレンチ

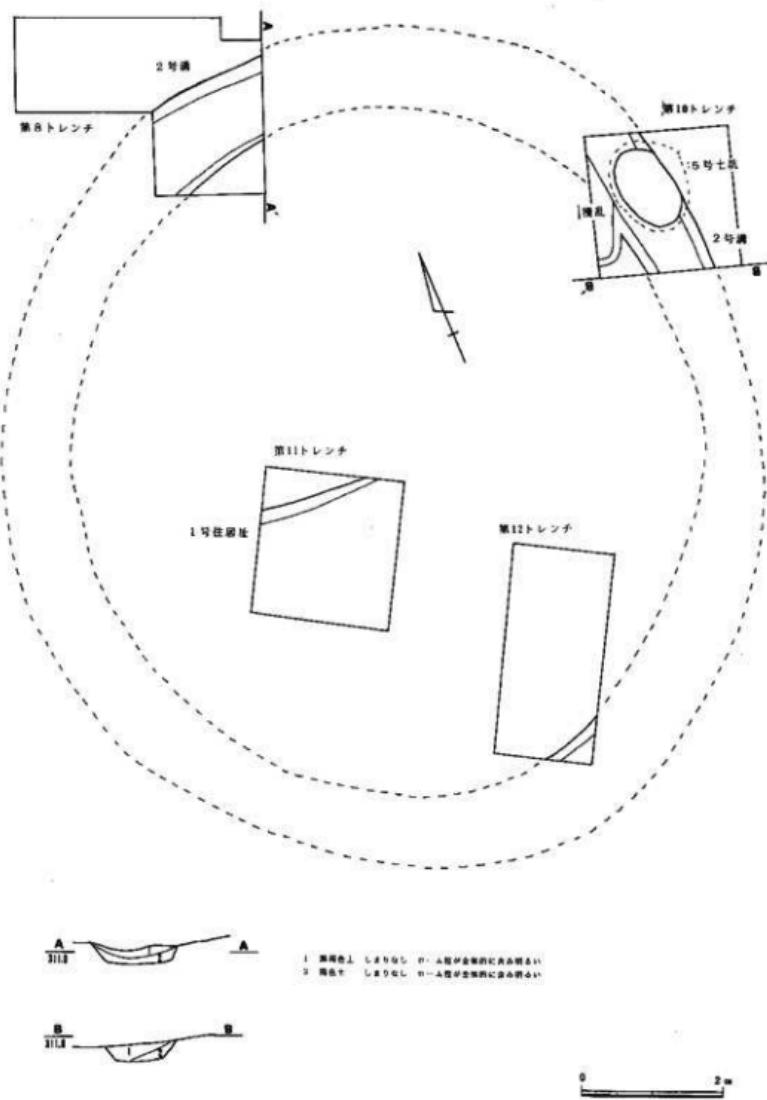
2号溝 (第4・13・19図)

第8・10・12トレンチの中で、円を描くように走っているのが確認でき、古墳の周溝と思われる。推定直径が12mで、幅約1m、深さ25cmを測る。立ち上がりは、やや急で、底面は、平坦である。覆土は、黒褐色土と褐色土の2層である。

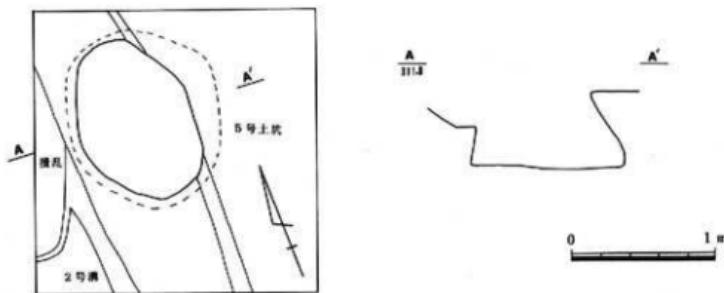
出土遺物は、第10トレンチで覆土の上層から、ほぼ完形の須恵器の甌が出土した。口径9.4cm、器高9.2cm、色調は、青灰色を呈し、口縁部と胴部に波状文が施される。また、縄文土器も混入していた。

5号土坑 (第5図)

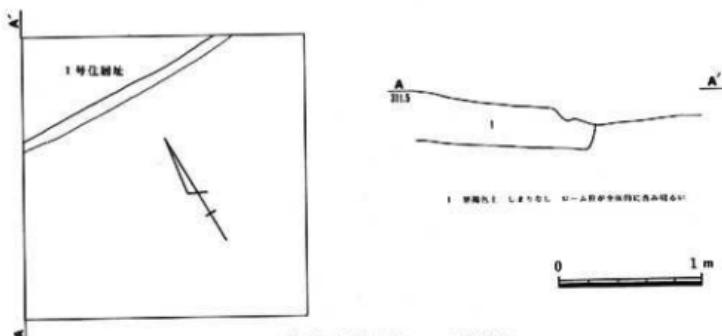
第10トレンチで2号溝を掘削していたところ、底面から長軸115cm、短軸80cm、深さ50cmの袋状土坑が確認された。確認面で切り合いは、確認できなかったため、溝に伴ったものか時期



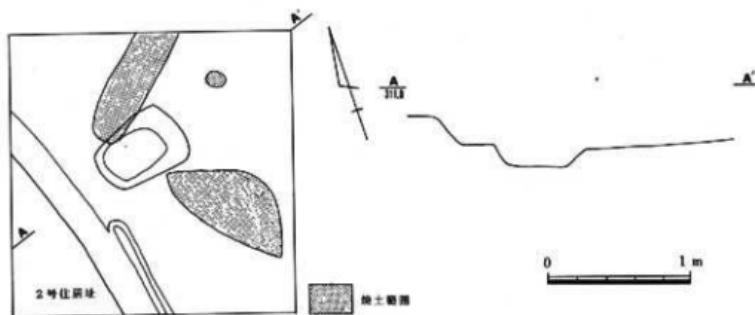
第4図 第8・10~12トレンチ (1/80)



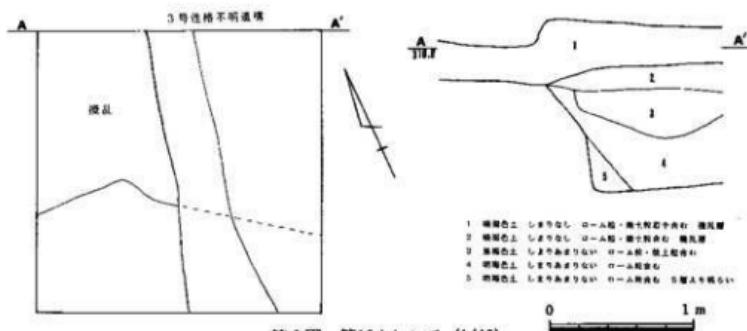
第5図 第10トレンチ (1/40)



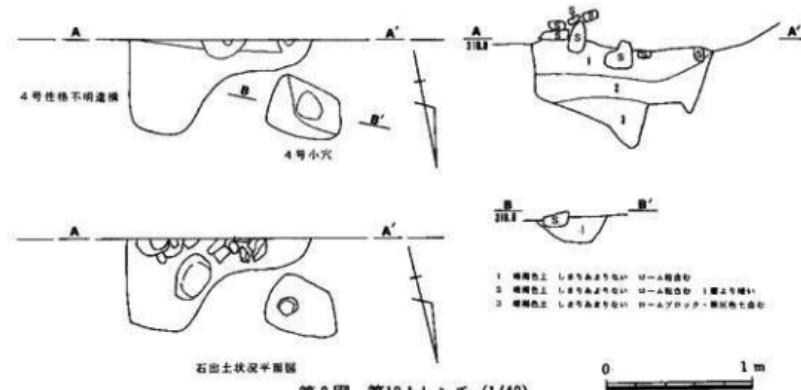
第6図 第11トレンチ (1/40)



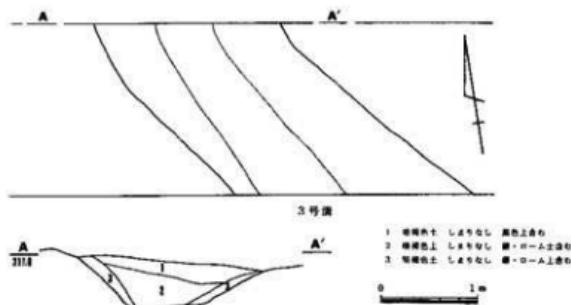
第7図 第14トレンチ (1/40)



第8図 第16トレンチ (1/40)



第9図 第19トレンチ (1/40)



第10図 第20トレンチ (1/60)

が違うものかは、不明である。

出土遺物はなし。

(4) 第9トレンチ

1号小穴（第2・18図）

調査区のほぼ中央に位置し、平面プランは、台形状である。長軸35cm、短軸20cm、深さ20cmを測る。立ち上がりは、やや急で、底面は、狭い。覆土は、暗褐色土である。

出土遺物は、古墳時代中期の高坏脚部が1点出土した。

2号小穴（第2図）

調査区北西隅に位置し、平面プランは、台形状である。長軸60cm、短軸55cm、深さ10cmである。急な立ち上がりで、底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土である。

出土遺物はない。

3号小穴（第2図）

調査区東北隅に位置し、東側に調査区外に伸びている。平面プランは、不定形である。長軸90cm以上、短軸60cm、深さは、最深部で45cmである。急な立ち上がりで、内部は、いくつかのテラス状に段を有する。覆土は、暗褐色土である。

出土遺物はない。

(5) 第11トレンチ

1号住居址（第11・17・18図）

調査区の北側に住居の北壁が確認され、南側の調査区外に広がる。そのため、平面プランや規模など不明である。深さは、約20cm。急な立ち上がりを呈し、底面は、平坦である。覆土は、黒褐色土である。

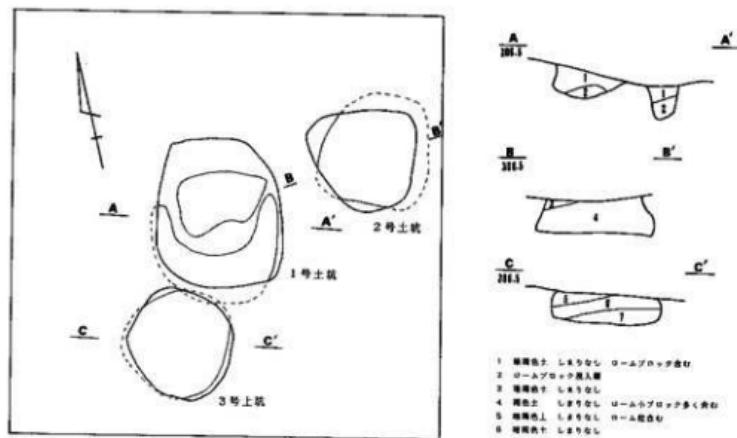
出土遺物は、古墳時代中期の土師器の甕・高坏・小形壇・壙が出土した。

(6) 第14トレンチ

2号住居址（第7・18図）

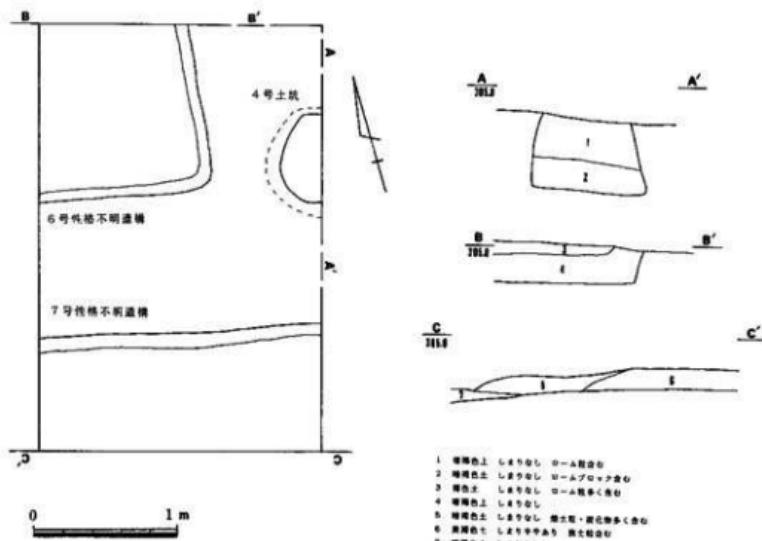
調査区の西側に住居の西壁が確認され、東側の調査区外に広がる。そのため、平面プランや規模は、不明である。深さは、約25cm。急な立ち上がりを呈し、底面は、平坦である。西壁の一部に周溝らしきものも確認できた。また、西壁の近くに方形プランの長軸65cm、短軸45cm、深さ15cmのピットが1つ確認できた。覆土は、黒褐色土である。

出土遺物は、古墳時代中期の土師器の二重口縁甕・小形壇・甕が出土した。



第11図 第22トレンチ (1/40)

0 1 m



第12図 第24トレンチ (1/40)

(7) 第15レンチ

2号性格不明遺構（第2図）

調査区北東端に位置し、平面プランは、大部分が調査区外のため、不明である。深さは、約40cmである。やや急な立ち上がりで、底面は、ほぼ平坦である。覆土は、黒褐色土と褐色土の2層である。

出土遺物は、古墳時代中期の土師器片が出土した。

(8) 第16レンチ

3号性格不明遺構（第8図）

調査区東側に位置し、平面プランは、大部分が調査区外のため、不明である。深さは、約70cm。やや急な立ち上がりで、底面は、ほぼ平坦である。覆土は、黒褐色土と明褐色土の2層で、明褐色土は、明るさから2層に分けられる。

出土遺物は、古墳時代中期の土師器の高壺が出土している。

(9) 第19レンチ

4号小穴（第9図）

調査区西端より9～10mにかけてのところに位置し、平面プランは、台形状である。長軸50cm、短軸40cm、深さ20cmを測る。壁面は、東側が急で、西側は、緩やかと全体的に不安定である。底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土である。

出土遺物はない。

4号性格不明遺構（第9図）

調査区西端より9～11mにかけてのところに位置し、平面プランは、不定形であり、半分以上が調査区外に伸びるものと思われる。確認面レベルの覆土上面に全体的に小石が覆われていた。長軸130cm、短軸65cm、深さ約35cmで、底面中央部に30cmのピットが1つ見られる。

出土遺物は、安山岩製の磨石が出土した。

1号埋甕（第2・13図）

調査区東側で検出された屋外埋甕である。掘り込みプランは、確認できなかった。埋甕のすぐ東側には、20cm前後の石を組んだ幅60cmほどの配石遺構と思えるような石組みが見られ、それが埋甕に伴う可能性もある。口縁部を上に向けた正位の状態で出土し、遺存状態は、良好で、ほぼ全周して残っていた。

土器は、縄文時代中期末葉の深鉢で、文様は、沈線が2本単位の綾杉文である。口径22.5cm、器高26.8cm。（第13図1）

(10) 第20トレンチ

5号性格不明遺構（第2・13図）

調査区西端で確認され、西側の調査区外に広がる。大部分が調査区外のため、平面プラン、規模は、不明である。深さは、約35cm。急な立ち上がりで、覆土は、明褐色土である。

出土遺物は、縄文時代前期後葉の土器が出土した。

3号溝（第10・18図）

調査区西端より9～12mにかけての位置にあり、南北方向に走る溝である。幅約1.9m、深さ50cm。やや急な立ち上がりで、底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土と明褐色土の2層で、暗褐色土は、混入物によりさらに細分できる。上層では、焼土が見られた。

出土遺物は、古墳時代中期の土師器で、甕・小形壺などが出土している。また、縄文時代前期後葉の土器も混入していた。

2号埋甕（第2・13図）

調査区西端より7～8mにかけての位置にあり、口縁部を上に向かた正位の状態で検出された屋外埋甕である。遺存状態は、下半部が良好で、全周して残存しており、上半部は、欠損していた。

土器は、縄文時代中期末葉の深鉢で、文様は、櫛歯状工具による綾杉文である。（第13図2）

(11) 第22トレンチ

1号土坑（第11図）

調査区のはば中央に位置し、平面プランは、隅丸方形を呈し、長軸105cm、短軸90cm、深さ20cmである。東西の立ち上がりは、ほぼ垂直であり、南側の壁面は、オーバーハングしている。底面は、凹凸があり、南側に下がっていく。覆土は、暗褐色土とロームブロック混入層の2層である。1～4号土坑は、壁面がオーバーハングした、いわゆる袋状土坑である。

出土遺物はない。

2号土坑（第11図）

調査区の西寄り、1号土坑の西側に位置し、平面プランは、不正円形を呈する。直径約70cm、深さ20cm。壁面は、全体的にオーバーハングしており、底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土と褐色土の2層である。

出土遺物はない。

3号土坑（第11図）

調査区の南寄り、1号土坑の南側に位置し、平面プランは、円形を呈する。直径約70cm、深さ20cm。壁面は、全体的にオーバーハングしており、底面は、平坦である。覆土は暗褐色土で、

3層に分けられる。

出土遺物はない。

(12) 第24トレンチ（第12図）

4号土坑

調査区の東端にあり、東半分は、調査区外である。平面プランは、円形を呈し、直径約60cm、深さ50cmを測る。壁面は、全体的にオーバーハングしており、底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土で2層に分けられる。

出土遺物はない。

6号性格不明遺構（第12図）

調査区西北隅で確認され、西壁の調査区外に広がる。大部分が調査区外のため、規模は、不明だが、平面プランは、方形を呈するものと思われる。深さは、約25cmを測る。急な立ち上がりで、底面は、平坦である。覆土は、褐色土と暗褐色土である。

出土遺物は、黒曜石片が出土した。

7号性格不明遺構（第12図）

調査区南端で確認され、南側の調査区外に広がる。大部分が調査区外のため、規模は、不明であるが、平面プランは、方形を呈するものと思われる。深さは、約15cmを測る。急な立ち上がりで、底面は、平坦である。覆土は、暗褐色土と黄褐色土で、焼土や炭化物が多く混入していた。

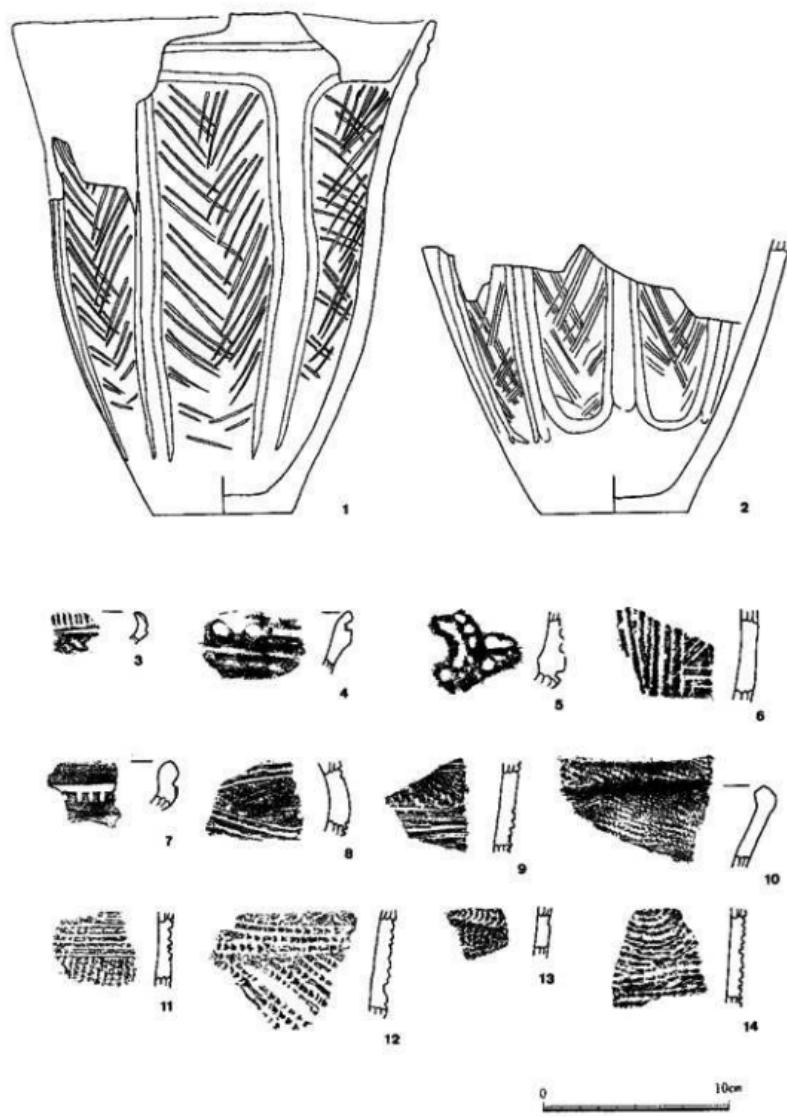
出土遺物は、縄文土器片が出土した。

5 まとめ

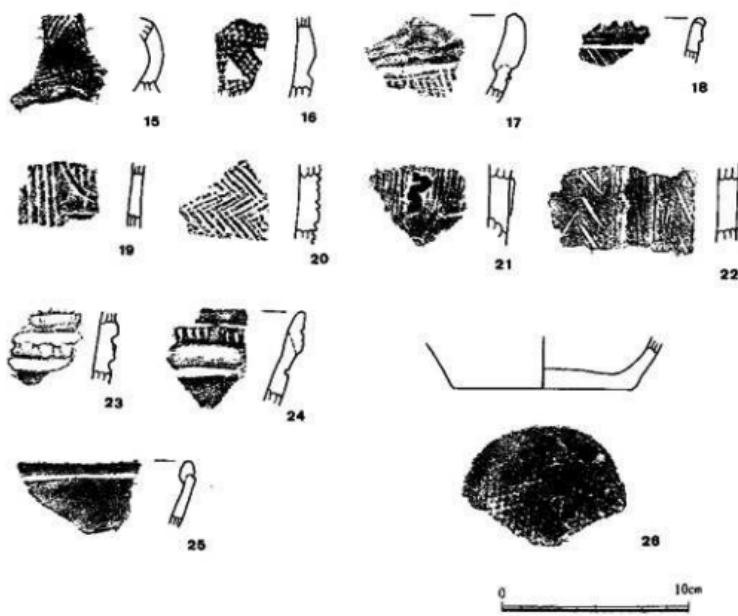
今回の調査では、竪穴住居址2軒、土坑5基、溝3条、小穴4基、屋外埋甕2基、性格不明遺構7基が検出された。遺物も耕作土や包含層から縄文時代前期～後期、古墳時代中期の土師器、須恵器の破片が多数出土した。

この中で時期が明らかにできたものは、1・2号埋甕が縄文時代中期末葉、1・2号住居址、2号溝が古墳時代中期、3号溝が古墳時代前～中期である。その他は、遺物量が少ないので、時期不明としか言えない。

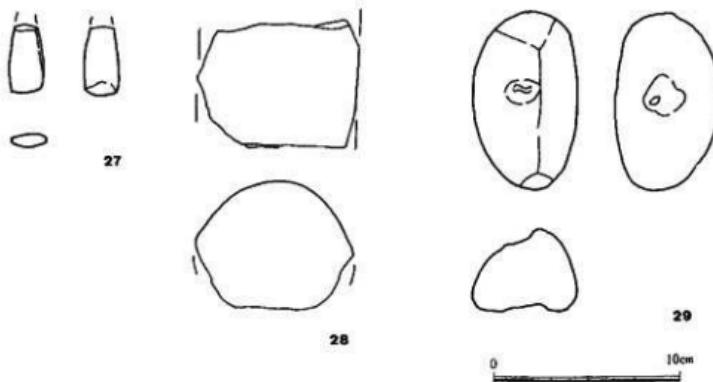
今回は、遺跡の北東部を中心調査対象地としたが、その結果、古墳の分布がかなり遺跡の東側まで築かれていたことが確認できた。そして、遺跡の範囲が今まで予想していたよりも広がることもわかった。第6～16トレンチの東側に通る舗装道が遺跡の推定範囲ラインと思われていたが、3号溝、1・2号埋甕、1～4号土坑の存在でわかるように、東側に広がるのがとらえられたのは、大きな成果といえるだろう。



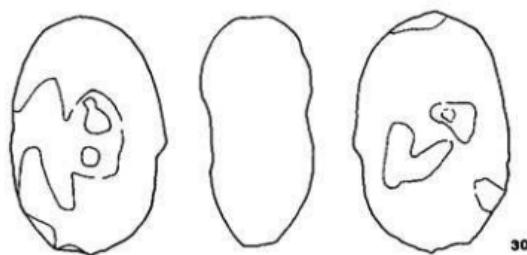
第13図 縄文土器(1) (1/3)



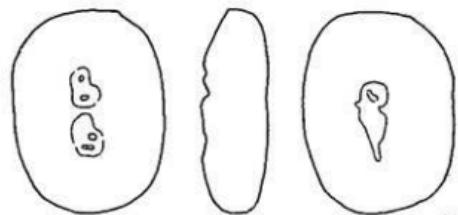
第14図 捺文土器(2) (1/3)



第15図 石製品(1) (1/3)



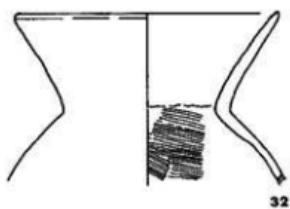
30



31

10cm

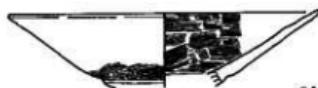
第16図 石製品(2) (1/3)



32



33



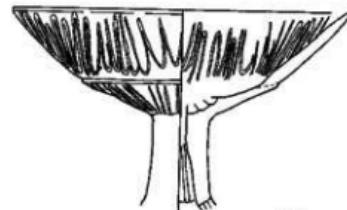
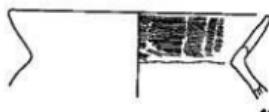
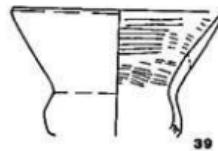
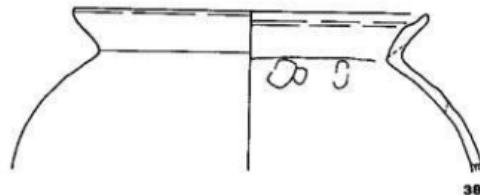
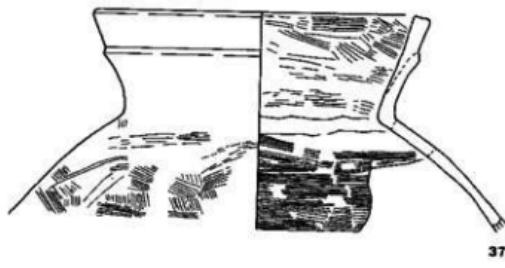
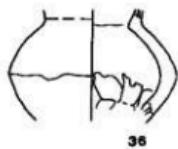
34



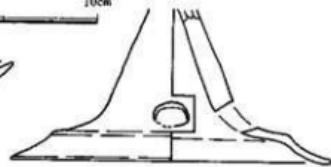
35



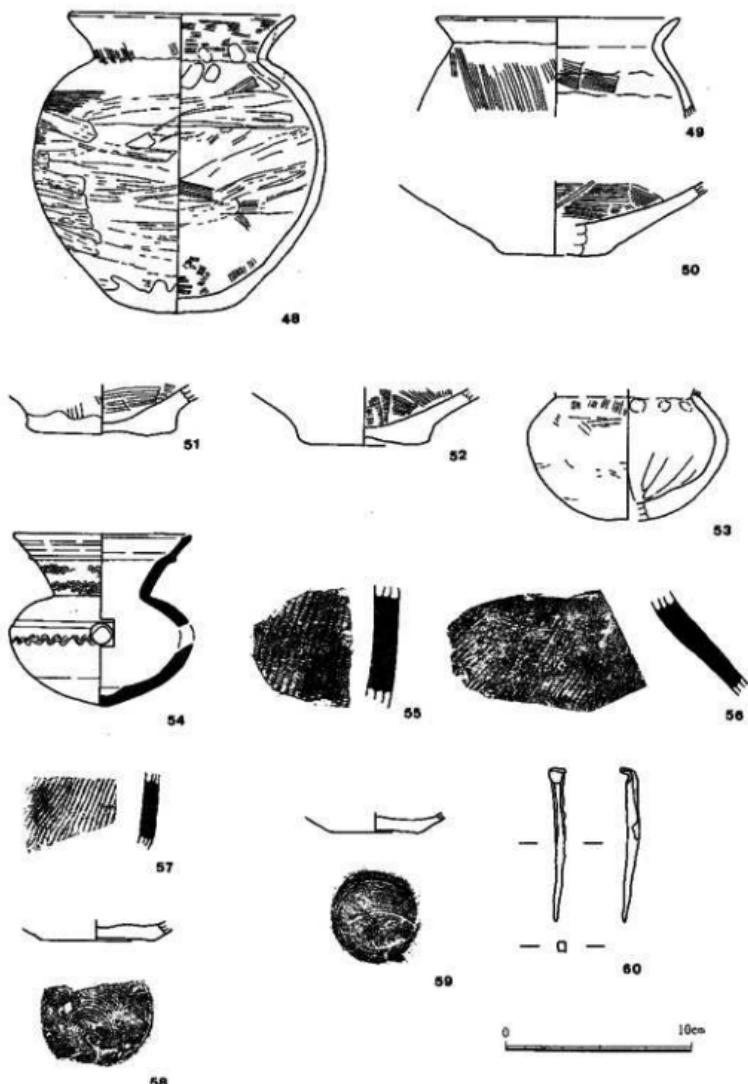
第17図 土師器(1) (1/3)



0 10cm



第18圖 土器器(2) (1/3)



第19図 土師器・須恵器・かわらけ・鉄釘

第2表 出土遺物観察表(1)

番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 様	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
1	1号埋甕		22.5	7.4	26.8		縞杉文	褐色	良好	白色 粒	中期末葉
2	2号埋甕				8.6		縞杉文	〃	〃	砂 粒	〃
3	1号性格不明遺構						粘土紐の貼り付け	〃	〃	〃	前期末葉
4	〃						円形刺突文	〃	〃	〃	後期前葉
5	〃						円形刺突文	〃	〃	〃	〃
6	2号溝						集合沈線文	〃	〃	白色 粒	中期初頃
7	〃						横走沈線の下部に刻目	〃	〃	砂 粒	後期前葉
8	5号性格不明遺構						圓文地に沈線文	褐色	〃	金色雲母	前期後葉
9	〃						圓文地に沈線文	〃	〃	雲母	〃
10	T—20						圓文R L	赤褐色	〃	〃	〃
11	T—19						圓文地に沈線文	褐色	〃	白色 粒	〃
12	T—20						結節状沈線文	褐色	〃	石 粒	〃
13	T—23						圓文地に連続爪形文	〃	〃	砂 粒	〃
14	T—22						結節状沈線文	〃	〃	白色 粒	〃
15	T—7						連続押圧文	赤褐色	〃	〃	前期末葉
16	T—14						角押地文に三角文	褐色	〃	金色雲母	〃
17	T—6						半截竹管による沈線	赤褐色	〃	白色 粒	中期初頃
18	T—14						刻目口綫	〃	〃	金色雲母	〃
19	T—11						集合沈線文	〃	〃	〃	〃
20	T—13						集合沈線文	〃	〃	雲母	〃
21	T—23						朱線地に蛇行路線	褐色	〃	砂 粒	中期後葉
22	T—14						ハの字文	薄褐色	〃	〃	中期末葉
23	T—1						刻目路線	赤褐色	〃	〃	後期前葉
24	T—6						横走沈線の下部に刻目	褐色	〃	〃	〃
25	〃						横走沈線	〃	〃	白色 粒	〃

第2表 出土遺物觀察表(2)

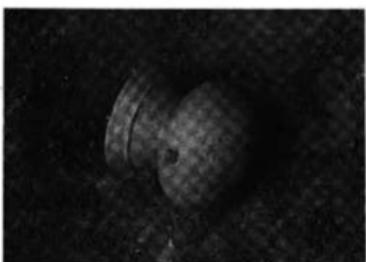
番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 横	色調	焼成	胎 土	備 考	
			口径	底径	器高							
26	T — 6				9.6		無文(底部一網代痕)	橙褐色	良好	雲母		
27	1号性格不明遺物	磨製石斧				残存長 3.7cm 幅 1.9cm 厚 0.7cm					蛇紋岩	
28	T — 29	石 棒				残存長 6.5cm 幅 8.5cm					安山岩	
29	T — 23	凹 石				長 14.5cm 幅 5.5cm 厚 4.0cm					"	
30	T — 1	凹 石				長 12.8cm 幅 8.2cm 厚 6.0cm					凝灰岩	
31	T — 19	凹 石				長 10.8cm 幅 8.0cm 厚 3.6cm					"	
32	1号住居址	土 師 器 壇	14.0			ナデ ハケメ			赤褐色	良好	砂 粒	古墳時代
33	"	土 師 器 甕	17.0			ヘラナデ ハケメ			橙褐色	"	雲母	"
34	"	土 師 器 壠	16.6			ヘラナデ ハケメ			赤褐色	"	"	"
35	"	土 師 器 高	18.0			ヘラミガキ			"	"	白色 粒	"
36	"	土 師 器 小型壠				ナデ			褐 色	"	"	"
37	2号住居址	土 師 器 甕	18.0			ハケメ			"	"	雲母	"
38	"	土 師 器 甕	19.0			ヘラナデ			"	"	金色雲母	"
39	3号溝	上 師 器 小型壠	11.4			ハケメ			橙褐色	"	雲母	"
40	"	土 師 器 甕	14.0			ナデ ハケメ			"	"	"	"
41	1号小穴	上 師 器 高				ハケメ			"	"	砂 粒	"
42	T — 7	上 師 器 壠				ヘラナデ			"	"	白色 粒	"
43	T — 8	上 師 器 高				ヘラミガキ ハケメ後ヘラミガキ			赤褐色	"	密	"
44	T — 11	土 師 器 壠	15.0			ナデ ハケメ後ヘラミガキ			橙褐色	"	白色石粒	"
45	"	土 師 器 壠	18.0			ヘラミガキ			赤褐色	"	密	"
46	T — 12	土 師 器 壠	23.0			ヘラナデ ハケメ			"	"	砂 粒	"
47	"	土 師 器 高	17.0			ヘラミガキ ナデ			橙褐色	"	白色 粒	"
48	"	土 師 器 甕	12.0	16.0		ハケメ後ヘラナデ			褐 色	"	金色雲母	"
49	T — 11	土 師 器 甕	13.0			ハケメ ヘラナデ			橙褐色	"	"	"
50	T — 7	土 師 器 甕		6.0		ヘラナデ ハケメ			褐 色	"	砂 粒	"

第2表 出土遺物観察表(3)

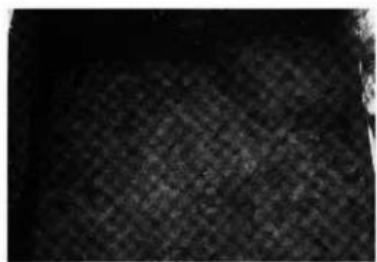
番号	出土地	器形	法量(cm)			調 整	文 標	色調	焼成	胎 土	備 考
			口径	底径	器高						
51	T - 7	上師器 甕		8.0		ハケメ		褐色	良好	雲母	古墳時代
52	T - 9	上師器 甕			7.0	ヘラナデ ハケメ		橙褐色	*	砂粒	〃
53	T - 12	上師器 小形壇				ヘラナデ ユビナデ		橙褐色	*	砂粒	〃
54	2号溝	須恵器 甕	9.4		9.2		波状文	青灰色	*	緻密	
55	T - 9	須恵器 甕				タタキメ ナデ		灰色	*	〃	
56	T - 26	須恵器 甕				タタキメ ヨコナデ		*	*	〃	
57	"	須恵器 甕				タタキメ ナデ		*	*	〃	
58	T - 15	かわらけ		6.0		ナデ 底部一系切痕		橙褐色	*	赤色粒	
59	T - 26	かわらけ		4.8		ナデ 底部一系切痕		褐色	*	金色雲母	
60	T - 15	鉄釘				長 8.2cm 幅 0.4cm × 0.5cm					



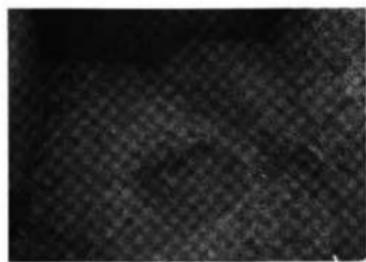
第10トレンチ



2号溝土器出土状況



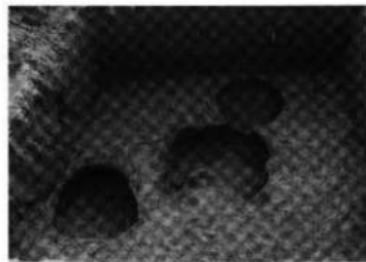
1号住居址



2号住居址



1号埋葬



1~3号土坑

図版
2



埋壺1



埋壺2



壺



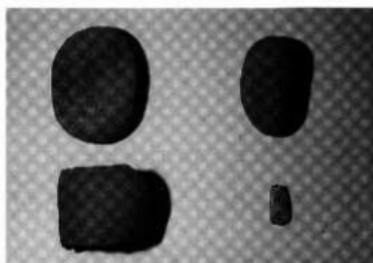
壺



鋤



壺



石製品

報告書抄録

ふりがな	たかべうやまだいらいせきII・あさりしやかたあと・さいぐさしやかたあと				
書名	高部字山平遺跡II・浅利氏館跡・三枝氏館跡				
副書名					
シリーズ名	豊富村埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第2集				
編著者名	岡野秀典				
編集機関	豊富村教育委員会				
所在地	〒400-15 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3800 TEL0552-69-2447				
発行年月日	1995年3月31日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
高部字山平遺跡 ①	山梨県東八代郡豊富村 高部字山平、東林		941107～ 941220	408	範囲確認
高部字山平遺跡 ②	山梨県東八代郡豊富村 高部字東林		931005～ 931221	474	範囲確認
浅利氏館跡	山梨県東八代郡豊富村 浅利字七歳		941018～ 941019	100	宅地造成
三枝氏館跡	山梨県東八代郡豊富村 木原字高内		950206～ 950216	100	個人住宅
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
高部字山平遺跡 ①	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	住居址 土坑 古墳周溝	深鉢、注口土器、石縁、 凹石、土師器	
高部字山平遺跡 ②	集落跡	縄文時代 古墳時代	住居址 土坑 古墳周溝 埋 窯	深鉢、凹石、小型磨製 石斧、土師器、須恵器 (蓮)、かわらけ	
浅利氏館跡	城館跡	平安時代～ 鎌倉時代			
三枝氏館跡	城館跡	室町時代			

豊富村埋蔵文化財調査報告第2集

高部宇山平遺跡 II
浅利氏館跡
三枝氏館跡

印刷日 1995年3月29日

発行日 1995年3月31日

発行所 豊富村教育委員会

〒400-15 山梨県東八代郡豊富村大烏居3800

印刷所 (株)エンドレス

〒405 山梨県山梨市上石森123
